一休へさし出しける一休かはゆく思しめし布袋に豆を入てとらせらるれはとりて歸りかさねて又其袋ゑ栗を入てきたりみぎのとく和尚にさし出してかへりけるとなり畜生といへども命を助けられし恩のほどをよくしれり然は人間の身として是非のわきまを知ちぬはさるにはおとれりとかんじ給ひ此事を旦那がたにてのたりたまふすましもいつはりのなきとなりけり

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり常ゑ百姓の業をなさず殺生とこのみ大酒博奕はいふに及ぶず其外わるき事のこりなく大いたづらなるもの有常々猿をかひ置ける然るに猶助といふ一子あり嫁をむかへしのち懐妊にて七ケ月といへる頃右飼れける猿何やらんすこしいたつら致しけるとて猶右衛門大にいかり猿を柱にくゝり付七八日も食をあたへずせめければ終には飢死なしけりかくて此嫁十月に滿て出産する處の女子目つき面つき猿のとくゑして全身しかも五六分ほど毛生てさながら猿のとき小見なりこれ全く親の邪見孫にむくふ處ゑして和尚まのあたり見給ひしりの物がたりおるべし

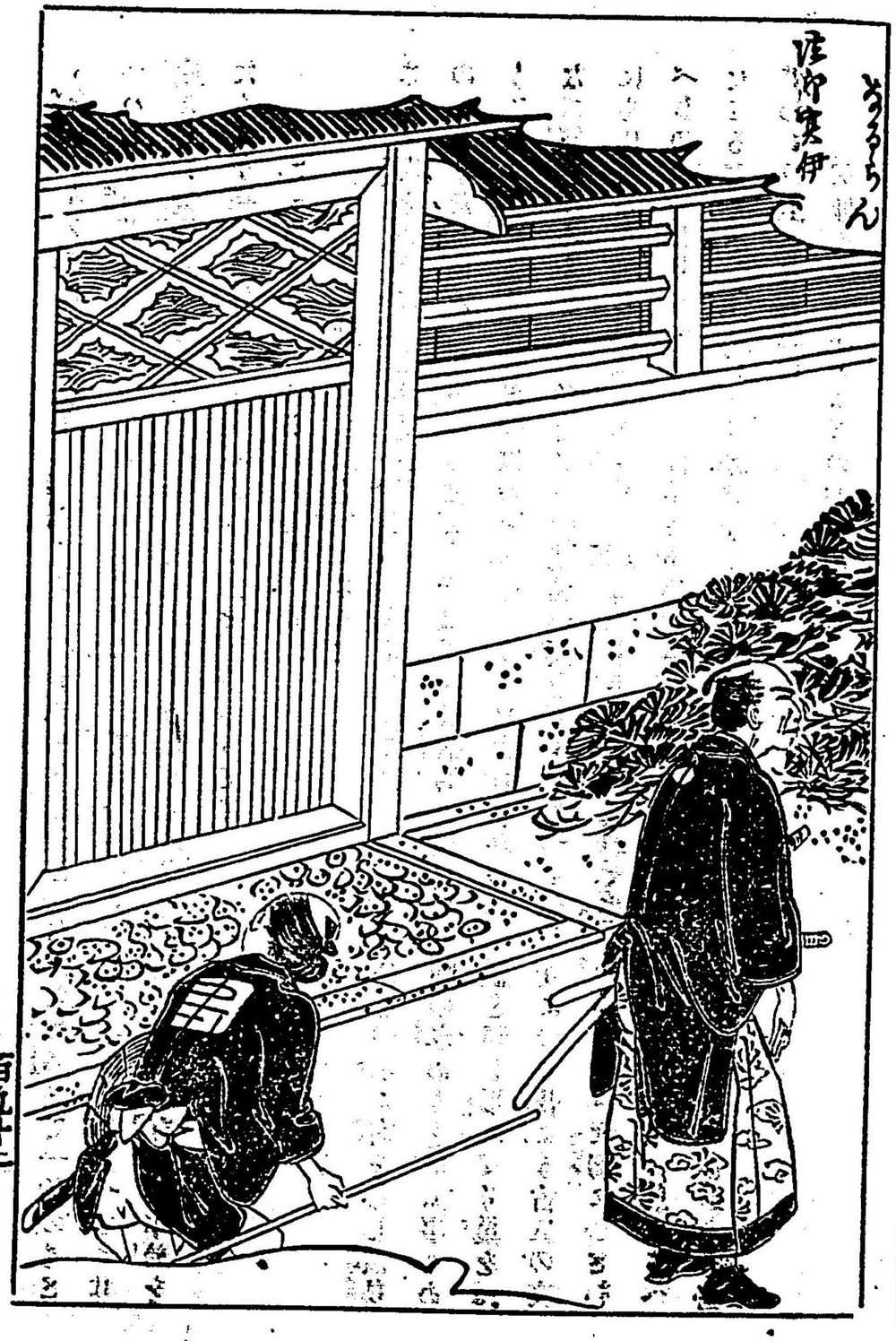
○一休初發心のとき起後路へ修行に下りたまふに信濃上野のさかひ近きとおろふ湯澤といへるとまろにてはや日の西山ゑかたむくゆゑ宿をこひ玉ふゑ在所のもの申やう御房宿を求め給ふならばむかふゑ見ゆる山中に古き堂ありこれへ行一夜を明し給へさりなおちかの堂にハ天狗住よしいひて住持するものなく久しき空院なりその心して行給へ和尚それこそ望む處なりとて　がて行て見給ふゑ此邊すべて山多くして陸奥の方へ峰つゞきにて駒ケ岳坂戸山清水白峰松ケ岳なと、ていづれも高山ありて物すおき土地なり和尚かの堂へ行て佛だんの上にあおり隠形の印とむすび心をしづめてねはしけるところに夜半のころろうへの山より人ならば二三十人斗の音してさゝめきわたり來る一休すはやと思ひ見給ふ所に堂のうちへむらがり入を見れば色白きに・げなる法師を手ごゝろよかきのせて小法師はあれにて遊ひ候へどんふかしてまつてたら〳〵と外に出て遊ぶときに此僧一休と見てそれゑかくれ居候ふ御房まれへ出られ候へといふ一休さては見付られたりと思ひて何の用に候やと申さるゝいや御房の隠形の印のむそびやうのあしくゆゑ見へ申なり是へれはしませれしへ申さんさらは物見給へ所詮なきやつばらに見せ申さしとれひ出したり先印むそひて見たまへさらばとて一休むすびたまへそよし〳〵只今は見へたまはぬそといふてその、ちは主從ともにうちまじはりて舞あそびあかつきがたに奥山へかへりけりさて武士の謀計と申はうそにゝたれども左にはあらざる道理とおはなし申さふ侍はとさらうそとつくは盗人と同去臭氣なれども敵をうつに謀計と智略とていろ〳〵はかり

ことがあつて隨分色を見とられずたゞかつてうつ法なり討負せると其うそゆへに大國を納め名を上手がらものとよばれて官錄にす、むは見事なものなりてうど商人のかけねをいひても内をまもり外よむかつて損をかけぬは手がらと名付捨れたる家ともたて人とすくふはかへつて善根となり商人にも色いろありて已一人よくならんと利德を心にかけて人の損失をかまはず手前へとり込む分別ばかりするものハ一旦の依怙わりといへども終ハは日月の御罰とかうむるものありとの詫宣をわすれずわれも仕合なし人ともよくなし平等に世とわたるへしと心がけたるがよし人に損かけて己が仕合をするはいろ品こゝかハれ二桝二秤ゞつかふも同し罪なれば商の内にもこれらの事はせぬ事なり是は人にしらせず目をくらますゆへ買ものもしらずかけねハ合點つくなれは人もしりてねぎる也かくすと明すとあらはれて有とのちがひにて罪にならぬといふ事明白なりさあれで御ふしんがはれてこざらふ

○一休關東心外寺にしばらくおはせしが此住持もそのかみ同學なればむかしのよしみを思ひ種々馳走をたまふあるとき一休とせんのあまり客殿に出て四方どながめてはする折から地侍と覺しき人供人四五人つれ來りて一休にむかひいかに御坊此寺の寺號山號はなにと申ぞ一休こたへて山號は別法山寺號は心外寺と申貴殿はいかなる御方にてまします

ぞ某ハ矢奈木雪折と申て此邊近き在所もの也此寺をこのね〳〵承りおよびしまゝに參詣申なりしかるにめづらしき寺號山號なりそれ三界唯一心心外無別法よして心の外に法なしいの成をか是別法心外寺とたづぬるに一休とりあへず答へていはくそれ柳の枝ハ雪折なじいの成か雪折とこたへ給へば此侍大にかんじさても〳〵答話かしこき坊主かな我等は内々たくみてさへさしあたれば失ぇする事あり又とかつて出ざる事多しうく時ハかやうのへんとうせられし事あつはれの御坊かなとぞかんじける

○又御雲水のころ駿州富士郡大石寺に知音の僧れそすとてたづね給ふに互ひあつかしう思召しをらく足を留め給へとて少しの滯留ありしより近村の凡俗を集め寺僧の法談などし給ふと助講なとありし折のら隣り村ハ村山といふに喜兵衛とて大百姓あり常に隙なる身なれば殺生のみ樂みとせしゞ庭先の柿木に鳩二羽來りとまりしを得たりと鉄砲とり出したちまち一羽をうちれとしけるに一羽の鳩をどろき飛去りしがまた元ゞ枝へきたりとまりしを又も玉とこめかへ同しく打落せしがふと一休和尚の法談を思ひいだして鳩に三枝の禮ありと聞しがまさしく此鳩はつがひのもとにして雌をさきへうちしや雄を先へ取し事や殘りし鳥の元の枝へ來りしは死を共にせんと我が玉さきと待し事うたがひなし扨々鳥だにも夫婦の約あるものをまれに人間とうまれあがら殺生をこのみ是までありたものの



、命をとるを樂しみと心得し業因のほどころそろしやとたちまち發心あて一休のもと
へいしり行若きよりの我があやまりをざんげして御かみそりとさづけさせたまへとて其
座よて剃髪染衣の身となり全體居士と法號をうけ明くれ念佛三昧に入八十有余の年齢を
たもち子孫榮へけるとなり其とき法名と下さる、とて

と、ろよりくひよるのけたる傀儡師
鬼とださふと佛出さふと

○さても因みに御はなし申さふ鳩といふ鳥はくれにれよへば親子ひとつ木よ宿をなし親鳥
のとまりたる枝ゑ三枝下なる枝ならでは子鳥は宿らず又鳥に反哺の孝ありといふ事もあ
りこれは生てより百日の間は親鳥にやしないれ百日にみつれば親と同し形となり巣をは
なれ餌をひろふなり其後百日が間親鳥へ餌をく、めかへす鳥なりよつて昔より古人の文
にも出たるすかし鳥にさへゑ様の禮孝あり人間とうまれて忠孝のふたつい大切につとむ
べきの第一なりやゝもすれば不孝不忠のもの出來るを神も佛もかなしみ玉ふて鳥にさへ
れとるぞと示し玉ふほどよ鳥にをとり玉ふな形ろ人よ似たりとも人とえいひがたき必
ずわすれ玉ふな古歌に

父母につかふあふぎのかなめから
しだい〳〵にする廣ふある

何事もおやの心よるのへさる

これかうしんの人といふなり

○越前の府中に長野銀助とて馬上の名人あり一休禪井より上り此府中に二三日とうりうし
て萬をとり行ひ玉ふよ彼銀助きゝれよび御齊も上申たしとて和尚をむかへ御齊もすきて
四方山のものがたりのころさる方よりいね馬を曳てきたり御六かしながら此馬を只今一
馬場せめて玉はれと申にやすき事なりとてやがて馬引よせのられしが此銀介と申は元來
せんきの病にて陰囊大に腫たりけるが鞍の前輪につかへて事のほかのりにくきやうすを
一休見てれかしくおもひ

はね馬のまへわよか、る大ふぐり
きんふくりんとこれをいふらん

とよませられければ銀助大ゐ興じけるとなり

○又下總國相馬郡を通り玉ふ頃和知川といへる水上よ大ぬまあり此近村にあるもの、妻十
二三歳なるま、子むすめを石の大沼のほとりへつれ行て此沼のぬしに申けるゝ此娘を其
方へ參らせ聟にし參らせんとたび〳〵いひけりあるとき又件の沼へつれ行かくのとさい

ひけるに俄ふ空すさまじくなり雨風しきりにして沼の水立すさまじき事のぎりなくいそ
ぎ家につれ歸りしに物のあとより追くるやうにおぼえければいよ〳〵れろろしく思ひか
の娘父に取つき日頃我等を沼へ母のつれ行いひし事をかたるに其夜大きなる蛆來りてく
びの上に呑をうおのして此むすめを見てはしばらくありてはうせぬる事度々なり爺親此
事なんぎに思ひいかゝあらんとなげきかなしむ其頃一休同國にさします事國中にかくれ
なければ智識と聞たづね行因果の子細を語りあかしなみだと流して頼ければ一休さても
不便の事やとて猶もくはしく尋玉ひさらば我文を書て得させんかさねて蛆きたるとき此
文をとなへ聞のせよ二度きたるまじとて其文にいはく

此女我女也母繼母也無我免爭可取

かくとなへきりすべし重て來るまじとのさてつかはさるゝ此文の心は此女めは我子なり
母はまゝはゝなり我かゆるしなくてはいかてかとるべきといふ心なり男よろこびくだん
の蛆の來ると待ける所に又れいの如すさまじくして來るされはこうとれもひさづかりし
文を一ゞとなへ聞せしかたちまちきへて失にけり蓍類といへども物の道理を能わきま
へ二度來らすと申傳へ侍る

前のつゞを申ませうさて人間といへれなしものかとおもへど人間にもさま〳〵品位
にちおひ都上藍といへどもうつくしひかと思へば田舍にもおとるも有佛といへば
一佛にあらず十方の芥佛にも五十二位のしや別がわのれ其外にわ名は同し事でもさ
ま〳〵ちかひがある是を同名異脉の法門と申すまた申さば五迷といふ佛の身より血き
出すとがも其内じや釋迦の身より血を出したるものは彼提婆といふ惡人大きなる石を
なげて指より血を出しろれゆゑ地おくへおちられたそれでわるいものは提婆〳〵とい
ふなりしあるに釋迦如來の入めつのとき耆婆といふいしや何とぞ今一度蘇生玉ふべき
かとさま〳〵療治の余り針を御あしよたて、血を出したさあ提婆がわくと同しやうま
地獄ふおつべしと思ふ所に業に相違し結句血を出した功德によつて天上へ生れて勝妙
のたのしみを得た爰をもつて合点したるがよい尤佛の身より血を出した事は同じ事な
れども提婆は佛をうゐ見て血を出し耆婆は御いのちををしみて血を出し取たり血をい
だす事は同し事で心が格別なにようて地おくと天上とのちがひい出來るまゞそのとく
うそをつくゝ同し事てよい事のため人のためにつくは同しうろでもよいぞ
といふとをゝめさせられんがために提婆をは地ごくゑ落しぎばとは天上界に生じさし
たものじや是はまゝ經の心じやうそをついてもつかいてもの事いつかぬがよしすい分
とりちぎにつとめたが當分いつはりかざりたるやうに見事よなけれ共神佛の御心よか

なふなりうなへい現世にい福とくを得往生よはごくらくへめでとふ往生し成佛をとげ常樂我淨の四とく波羅みつにのぼりをしやはしやかわいやの念慮もなし常住不退に徹妙の說法ちやうもんしし〳〵ますく〳〵すゝみ後はおのづから一切衆生利益の心もれこり玉ふべしあらうらやましの境界や南無あみだ佛〳〵さて此度おの〳〵の望により五戒講談をあらましのべましたとゝく大悲經の中の種といふ種の字をわすれず悪いたねとまかぬやうふよきたねをまかせられよかし今一冊は愚僧がこゝろみの法語なり皆人この文とみて邪見外道の思ひをなして直に活佛となり給ふおしゑと書のこしませう

○こゝに常州德念寺と申淨土寺あり住寺の長老の旦那よて有けるがいのゝおもひけん先祖より代々淨土にて候が不斗禪寺へ參り久しくわづらひて程なく死けり其子すなはち禪寺の住持にねんどうを賴むよしをかの德念寺ほのゝにきゝて中々先祖よりわが旦那にまされなししかるをなんぞや禪家へわたしてねんぐうさせん事前代見聞の恥辱なるべしたとひ此事に於てはすくひにれほふともわが引導せんものと思ひ定て在所のもの其外あふれものを二三十人ばかりかたらひみちんよなさんとひしめくと此よし禪寺に聞ゑしかばいや〳〵さやうな六かしき死人を取おかざるとても何のはくるしかるべし入らざる事なりとて打すてぬ三十五日のとふらひすぎて此德念寺俄に狂亂して狂ひ出て色々の事を口ばしりけるを何れも旦那衆めいとくして座敷牢を作りおし入おけゝ牢をやぶつて出屎をたれては手にゝきりあるひは說にぬり又は己が食する飯器に入て在所中をもて歩行丸裸になり着ものずん〳〵にくひさき家々へとび入人の妻子をおし付うち倒しなどしてさま〳〵悪わるくくるひけるはゞよ終よくるひ死にし、けるやがて火葬にしけるに石などを打くへたるやうに黑くはなりけれとも灰にもならずふしぎにおもひ炭木を山のごとくにつみて燒ども少しも燒す弟子もこれをみて大にれゞろきこれ只事にあらずいかゝはせんと評議なす打から一休和尙其ころ常州ゑまし〳〵けるが或人の申やう上方より一休和尙といふ知德の僧下り、ゐたまふ此和尙よ子細を尋ね見たまへかしと申ける弟子坊主幸ひの事かなさらばとて弟子一休へ參り去かゝ〳〵と申ける一休き、給ひてそは不便のことかなそれ佛法と申は人我の相をとゞめて心を納るをもつてせんとすまして僧法師は大じひ心をもつて暮らとして人をおしゆるものなるに愚痴放逸にしてかばねをあらそう事生ながら犬に似たりあさましき次第なりそれかしたちまち灰にして參らせんとて諸行無常の四句の文と書たまひて是を死人のうへゑなげかけ玉い〻即時に灰となるべし早とく〳〵とあれば忝なしとてとりて歸り彼ふすぼりたる死人の上へなげかけゝればあぶらをかけてやくが如くべら〳〵と燒て忽ち灰とぞなりにけるふしぎおりし事ともなりさるによつて和

尚を佛乃再來といとぬ人ころなりける

○一休北國より京都へのぼり玉ふとき越前敦賀の宿をうち過かいづの山中ゑ一宿し給ふが何ものかいひけん今よひ此宿にとまりしい都に名高き舞まひの大のしらにていまは入道して世間をとて諸國を修行し給ふと承るいざ〳〵方々みな參りて一ふく所望せんはいかゝ皆々是は一だんの事かなとて太勢旅宿へ詰かけて一休に對面し御坊いうけたまはり候へば都がたゑて舞の大かしらどの、よし遠國遠里までも其沙汰かくれなし幸これに一宿し給ふこそ後のかたり句になし申さん一ふし舞てきかせ給ひ候へとせめかけて申ければ一休も大ゑ迷惑しこれもおもひもよらぬ仰かな見給ふとき坊主なれば經陀羅尼などい少しぞんぢたるが其舞といふものはさらゑしらずと斷れければ在所のものどもいや〳〵なにとのたまふともたゞ一ふしの所望候せひ〳〵御舞なきならば今宵の御やどいかなふまじいかに〳〵とせめかけて所望す一休さて〳〵うれは迷惑千万さためて人ちがひなるべしとさま〴〵わび玉へども皆もんもうなる里人なれば更に合點せず是非とも〳〵と所望すれ〻しばし案じて愚僧けつして其舞まひよてはなく候へども一ふし舞されば御のへりなくもせんかたなし愚僧わかきときに高館といふ舞を少し見覺たるがおほつこのなく候へども一ふし舞て見申さん先鈴木の三郎が紀孫藤白より奥孫衣川まで付し所を少しまひ

申べしといふゑ所在ものたかだちが何やらんしらされども早く〳〵といひけるに一休座をあらため扇をてうとうちてさる程ふすゝきの三郎しげ家は旅のしやうぞくめされつゝ藤白を立出て奥州さして下られけるほどにくだられけるほどに〳〵と凡二三十へんもくだられけるほどにとばかりくりあへ去〳〵申されけれゝ里人等はふしぎしていふゝ御坊さきほどより同じ事をくりかへし〳〵のたまふはいかゝの事にや早く舞をまふて見せられ候へ一休さあらぬ顔にて三郎の紀州より奥州まで七十五日が日數をの、りて衣川へつかれたる事なれば先くだられけるほどゑを三十日も五十日も申つゝけにしてうれから衣川に着しての舞をまひて見せ申べしかの〳〵にも此家ゑ八九十日逗留して衣川の處を見たまふべしと宣ひければいされも顔を見合大ゑあきれしばらくの間さへくだられけるほどにてたいくつし侍るにいかでか七十五日が間きく事はなるまじとて皆々家にぞかへりたるとなり是も一時の才智なりと人申あへり

○今出川通によしや如齋といふものあり家て和尚とまとはり厚かりしがうちつゞき用事しげく久し〳〵和尚のもとを尋さりしかは心にやかゝりけん文をしたゝめて此頃は用事つゞひ候もへ御見舞も申上ず御ぶさた申候いつれ近々御見舞申上るなどとはりの文をつかはしける其返事に

見舞とて見まふてくれゞ見まはずと
よしやじよさいと思ふ身ならば
とよみてつゝのはされける如齋これを見て御坊の今よはじめぬかるき御事のなとかんじけるとぞ

○一休和尚高野山へ登り玉ひ四方の山々をながめてさても聞しより尊きけしきかなとながめれはまけるに高野ひじりども立いできて一休を見ていかなる人ゞと尋ねければ愚僧ハ名もなき道心者ゝて侍るが此山はじめて一見仕候へゝ余り風景がおもしろく侍れゝこし折の詩の歌か一首つかまつらんとぞんじつゝ〳〵として侍るとのたまへばひじりども一休とは中々れもひがけねばしはらしき事をいふ御房かゝをわざにいにるめくらの垣のそきすゞちの嘲て心なゞさむとやろの身はかゝみてこそとてうそざむげある形ふりよて珍は此山の名產高野がみそりの及よりもうすきゝり付よて細首のいとゝおふなき体にて詩哥を案づるとはできたりと口々にいやじめ笑ひけるに一休耳にもかけず空うろふきておはしけるがやう〳〵一首仕りたり硯紙たまはれと申されければ何一首出來たるとやさらば拜吟仕るべしとうち笑ひ硯紙を出しければ一休筆をとり彼東坡居士が經山寺の詩を山がたに作りしを例として

山秋葉落　山春開花發　山迎連峰報佛心亦空　山高近都卒內院土進空　山閑表華藏世界地醒寂　山平幽臨化佛惱亦寂　山夏涼風煩惱寂　山冬素雪寂亦寂

此山形の詩のよみやうは
山高近都卒內院
山閑表華藏世界
山迎連峰報佛土
山平幽臨化佛地
山春開花發心進
山夏涼風煩惱醒
山秋落葉空亦空
山冬素雪寂亦寂

かゝのとく即時に筆をとりさら〳〵と認玉へば一山のひとり大におどろきさても形容に似合ざる見事なる筆跡といひ又目なれぬ詩の体かなと明たる口をふさきかねさて〳〵先刻は皆々よしなき事どもをいひて御僧とはづかしめし事のへす〳〵もはづかしうこそいかなる人ぞ御名をなのり玉へと口々に申けれゝ其詩の下に候とのたまへばまことに小文字候が何一とゝ申ゞとたづねける其中に一人のひとり眉をしをめ此詩の筆跡とよく〳〵見るゝ京紫野なる一休和尚の書なりさるから一としるされたりさればこそ曲者な

りとふり歸り見るに和尚は彼方へ下向し玉ふひじりたちろれとゞめまゐらせて過言をわやまれとてはしり付て引とゞめ一休和尚とも存せずして段々無禮と申たり御免ありて先ゞ坊中へ入らせ給へとゐんぎんにのぶるよ一休いや〳〵何も斷はり玉ふべき事よはさら〳〵なしとてきげんよく坊へ歸り給へばひじりたちさま〳〵馳走とまゐらせけるさて厚く禮をのべ下向し給ひける跡にて一人のひじり申やうかゝる名僧また登山し給ふ事まれなり願くは大師の御影に贊をたのみ申たらばいかよといふにいづれも尤と同じさらば今一たびよびかへしまゐらせんと又追かけ奉るに一休は何事よやと仰らるればしか〳〵のよし申よ一休わらひ給ひてうれほどの事また立歸らずともなると也御影を急持きたられよとて道なる茶屋ゐ休てれはしける人々おどろき大師の贊を請ふよ立ながら思案もなくなさるゝ事聞より大博學の祖師かなと舌の根をふるひけり扨大師の御影と持來りければ

弘法大師活佛死ねば野はらの土となる

と一筆にさら〳〵とした、め給ひて下向し給ふ人々ふるき事もありとゐそき登山して學匠よ見せければ格別のたゞけ事ありしゐばまたひじりとも口を得ふさがざりけるとなり

一休諸國物語圖繪卷之五

○さても一休和尚能州蟹川村の草庵にましませし頃泉水のきしよ水の上へをよんで横たひにねたる松のおりける弟子衆をあつめて此松を眞直に見るものやあるとたづね玉ふ皆々立かはり入かはり見られけれども横ばいの松なり其とき蟹川新右衛門參り合せてわれらいかにも眞直よ見て候と申されければさては如何にと仰れたまことにいかみてこそ候へと申されれば和尚手をうつてよく見られたりとて五十則をゆるすと仰られける

○和尚熊野山へ御參詣まし〳〵て本宮へあがりたまふころしも春の半なれた山々谷々の櫻都三月の頃よりもひと目出たかりけれバ拜殿にうちのぼり四方の風色をながめまし〳〵ける處へ社僧一人まかり出て客僧ハたゞ人とは見參らさずと申ければ中々われらはたゞ人にては候はず御らん候へ出家よて候と申されければ彼僧はさもをつぶしこは興がる御僧かなとひとつふたつと物がたりし玉ひて和尚この僧は少しはあせる者とをはしめし高野山の詩の事ををはし出させ此山にても一首を作りてなぐさまんと矢たてをとり出しさら〳〵と書て彼僧に見せ玉へば其まゝ神前へろなへてさて〳〵御筆跡見事に候都人と見申さひがめかと申ければ和尚答へてよく社寮しられたりわれは都紫野の一休といふものなりと仰られけれやさてはゐねてきゝつたへし和尚にてましますかとてかの神前ふさ

、げおきしをとりきたりとてもの事ゑ御名を書付玉へとねがふにさらば後の代あたり艸
ともなりなんと一休老人偶題とゞ記し玉ふ其時に

七山里放光
五山瀧吟落碧三
三山海涙高舶片雲尉
一山廟零一扶桑神片。湖。景。
二山客成群數万人。輪塵。春。
四山樓錦動月輪惱宮
六山谷洗流烈本
八山花猶顔

一休老人偶題

さて彼僧は一休和尚なりとて自宅へ招し横槌て庭とはき杓子で芋をすり御馳走申事おろかならず析ふし花のさかりなれど庭前のはなをも見たまへとて酒肴をいだしてなぐさめ申さゞかの僧申けるは此山へまた御越なさるゝ事もむかりがたし末代の寶ともなすべければ何にても一筆遊し給れと申ければ安事なり御望みあれとのたまへばさても拜殿にての御作の詩休はいかむへよりもかゝる休の侍りけるあとをとふおいかにも古へよりわりし事あり唐土の東坡居士が經山寺にて作りし詩休なりとかたり給へばさて〳〵めづらしき詩やされどかゝる山奥に住みとに學文もなき文盲の我々が目なれ耳なれず候相成べくは愚なる我々が耳なれ目なれたる事をねがふなりと申上ければ和尚うちうなづき給ふ折ら春風ふきて櫻のばら〳〵とちりければ貫之のうたを思ひ出されて

櫻ちる木のした風はさむからで
空よしられぬ雪ぞふりける

これいかにとのたまへば彼僧いや是もいまだ耳なれ申さゞる處なりといふ又さくらの花の風にちらされさつ〳〵と見だれければ其まゝ

雪やこんこあられやこんこ御寺の
かきの木に一はいふりつもれこんこ

是はいかゞと申されければ彼僧大ようちわらひさてもれぞけたる御僧かないかに耳なれ目なれしものとてもそれはあまりに候と申せば一休もわらひ給ひて實もつともなりいで〳〵其望の目ゑも耳ゑもなれゑとをかきてまいらせんとて

きねが鈴海山木こり谷のこゑ　かく

入あひのかねに庭前のはな

とあそはしければかの僧さてもよき御のる口や實に見なれ聞なれしものをのぞみけるゝろ恩なれとて御口のかるきをかんじ侍るかくて色々馳走申ければ次手なればかの東坡が詩を書れくべしとて

一山花發茂林片食道　山僧　山花發茂林

二山遠路幽深沈吟蒋　山遠路幽深

三山雲飛片倫問　山雲飛片々

四山水碧沈抱相　山水碧沈々

五山鳥菓來　山鳥菓倫食

六山猿樹還　山猿樹抱吟

七山僧水問道　山僧水問道

八山客　山客還相尋

かゝる書あれはこれかは生涯御てゞかへり給ふとなり

○爰に界外の事なりし紅一休和尚へ常に參りて御心安く御意を得たる又次郎といふ町人ありけるあるとき妻飼豚汁をしたいあ食て所るが孫の外丈辭ひ終又その日のうち發流しけるが今又の時に申けるは我世にありしときい死る事はいかの頃やら思ひ出せるなれば後世とて潮ひ授し事もなくされども一休和尚へ常にしてゝ申し御勸がたもは是歌浄連結集あれは遺引導へもたのみ奉れかゝる不慮の死を仕けるさてゝ哀まれ思召度あはかなるあすとい思ひ置て終はむなしく成はける妻子眷屬なれへ申上ればおいとやすき事なり扨やふびんの仕合と仰られけるしある所へはや時分もよ水鉢聞和尚樣御出とあふぎたてまつると再三人をれこしければ一休仰れけるはいや〳〵われも罷出るはふよばす引導つぶさよ書てつかはすべを誰樣て発樣みゆばさ生てはふおれは又仰られけれを妻子なげきて遺言にて候間ひらに御出でされよ御慈悲奉りうけさま〳〵ねがひけれは一休のたまひけるはいやく我等が出ればかへつてのれがまよひとなるなり則書てつかはそべしとて

海中有二毒魚一名二云二河豚魚一
面腹白斑班人不食二此魚一

嗚呼痛哉又次郎食之怨死來

彼歳五十四　彼歳五十四

合て珠數一連百八煩脳のきづなとふつときつて行たい方へつゝとゆけ

木曾十七寅の年角のないころ添よけれ

とあそばしてつかわされけるとのやしのれはれの〳〵肝をけしけれども仰なれば其おとくにれこなひけるが其引導の書たるを其子供秘藏して今よ傳て其家のたからとしかへもなき墨跡よて代々所持仕りて有けるとなり

○君ぶちとせをへんこともあまつれとめの羽衣よのふ

註君とは諸人なりいふは、ろは唐の玄宗皇帝の御代にこうえんといふ人とゆつそなして目の前に宮殿ろうのくをおし乙女をくだして羽衣の曲をおさしむ玄宗皇帝異し見たまふにしばしもなくきへうせぬとふるき文に見へたりしかれはちとせをふるとも夢のとくにきえんとは事か又四十里四方の石を羽衣にてなでつくすといふ劫石のたとへあれば久しき事を見る人のこゝろにまかすべし

○ばんぜいまでませはふがうへ

○此文をよく見てながく生死をはなれて不老不死の身となれりと也

○我見ても久しくありぬ住吉の　きしのひめまついくよへぬらん

われとは大明神なりすみよしのきしとは苦をはなれたる彼岸をいふなり姫松とは故をやびやかにしていつもかはらぬ常磐木の見どりの松なりいふ心は天地のいまだはじまらぬさきの神代のとき彼岸の姫松を見てかくよめり此神代のときといふは常にわたゝしなき心胸あり姫松といふも人々ぐそくの本智なり松はみさほにて四時をはなぬ物ゆゑにたとへてかくいふなり今も身を姫松に得れい不生不滅よして變する色なくくるしみたへはなれて彼岸にいたりて愛樂あるべし諸人此歌をしりてひめ松になれとの事なり大明神とは文字にれふきにあきらうなるかみとかく神とはこゝろなりくらきまよひの人とあきらかにする神也また一説に姫松の變化して大明神とありてこの歌を詠せしともあり是としらせんため此古歌と引給ふあり

○目なしとちゝ〳〵

目なしとは人々具足の自性なり自性本萬の見をはなるゝがゆへいかく名付たりもし佛を見法を見心を見有を見無を見本を見末を見すべて何にても一寸と見ても見る事

ゆも目あるものにして目なしはて目なし事はなり名もなく方角所もあり経典天地万法事
ち万物にかくれて古来無識なく色形あふしてなすの色形のかたちにあらはるる是世界國
○是のわりとわらゆるもの、本源なり佛とも異如とも阿彌陀とも観音とも本智とも自
性ともいふこれをしるを佛になる人とも悟りの人とも凡夫なり釋迦一代の経文も皆
此目なしとの事を人々にしらせんがためなり

楞嚴経に阿那律陀無目不見と說給ひ

又同經に曰阿那律陀白佛言我不因眼觀見十方清淨洞然觀見掌果

如來印我成宣阿羅漢

○々佛六圓通說たまふこれそのひとつなり是ふ林の中に此莊子目なし法名無耳
ろ〳〵とはたゞねるこゝとばなり

○こゝ見ぬかねてましませ

よあひの君聲をきくものは何者ぞと明くれすてれかすれかるるつねにあ聞事近
たづねあふべしかくのをくして尋ねあいたる人をくはんおんとりよも観音圓通の門
○是又二十五のぼさつの中に第一の菩薩ととするなり
○扨一夢前尊の御歌い浄土宗にて有しとかや一休居にかゝる法語をかゝるつかはし又は水か

〳〵みどいふ雙紙を送りて道とれしを給へどもしか〳〵御さとりもなく明暮たゞ念佛のみ
にて過し給ふ一休聞しめし一段の御心入なり念佛にて佛になられん事はうたがひな
けれども此所より愚僧が庵へ御出あらむに何のうたがひなく御出あるべし是よく常に道
しり給ふゆへに苦もなくうか〳〵とあるき給ひても庵へは御出有なり又かた田舍人がわ
が庵とたづね來らんにいか程道にまよひて我等が庵ある上は何れた去れあふなりその
たつねるまでの心苦しきあいたがまよひなりと仰られければ是ならば何にても示し給へ
と仰られければ御袋のいい

目なしとちゝ聲みついでましませ

昔人のまとりとやらんいふことを悟る其ならひはじめに父母もなくとつと已前の我身は
何なる人といふ迷ひといふものを知らせとゝかむるものもじらず然は尺加彌陀ぼ佛ぼ
のとばかりやといふものはとはずがたりといひければ一默してをりける此沿を見給
へと仰られければ御袋のいい

いへばはわれいをねはむねおさはかれて

をもへぬさきや佛なるらむ

とあそばしけれは一休よろこびたまひてとりあへず一首とよみたまひける

いまはやこいろにかゝる雲もなし一音さやかなる

月のいるべき山しなければ

とよみ給ひて御工夫尤〳〵とてよろこびてかへり給ひける

○そもそもみあ人たちの悟りとやらんいふ事をさとるならひはじめに父母もなきとつと

いせんのわが身は何ものかいへきかんといふ

父母とは天地のことをいふとつたいせんとはわが心のあるを天地を

器人も我とも人とも何ともすあしもわからはさきといふ世ばかりをも

ふべからそもし生ぬさきとをはゝ千歳にをよぶともしるべからず我今までなきゝ

のなにをこるなりとこらぬさきにはは其をおりたる心はいかやうになつていたずと

かくのとくこゝともつてしらば生ぬさきともしるべし

○なにとしてしらぬ事が申さるべく候やたゝべんてつもなき物なりと思ふべし

知らぬ事とはすなはち目なしのことなり目なしは萬物にはなれたればへんてつもあ

きとなり是めなしといひあらはさんがためなりしかれどもひとへに又しらずして有

きといふにはあらずたゝあるともなしともそもへばはやへんてつが有ぞ

○たとへばよしのはつ瀬のはなもみち色々にさきてちりてもまたもとの樣にあへるがご

とし

わが心のいろ〳〵にとこり又なくなるとをたとへたり其心のをこり又さるとこゝをも

よくしるべし色々の心がをあらざるを何者がするぞと急々に眼とつけて見るべし

罪科こそ則目なしよ花もそのとくさきてちりてなくなるなり花のさくときをれ何の子

細ぞちるときこれ何のしさいぞなくなるはあれ何のしさいぞとしらせんがため也花

○人を見てはなの心をしらむとせばあふぎて棒をあげて月をうたんとするがときより長

つかぬ事なりわが心のうちで花の心をも天地の心ともあきらかにしるをも其證據よ

○はゝよみに四時のうつりかはり月日のはてびて月しよくまで分厘もたがはざるなりいにしへ

の聖人なればとて天の外地の外主でめぐりめぐるき見るふをあらずたゝ我心の繪圖と

○見てしるも出すなりそのたがはざる事ともつてしるべし

○本來もなきいにしへの我なれば死行かなもなにもなき

○こゝ[illegible]いしへもいまもあはらぬわれなれば我と思ふべきとのはもなし

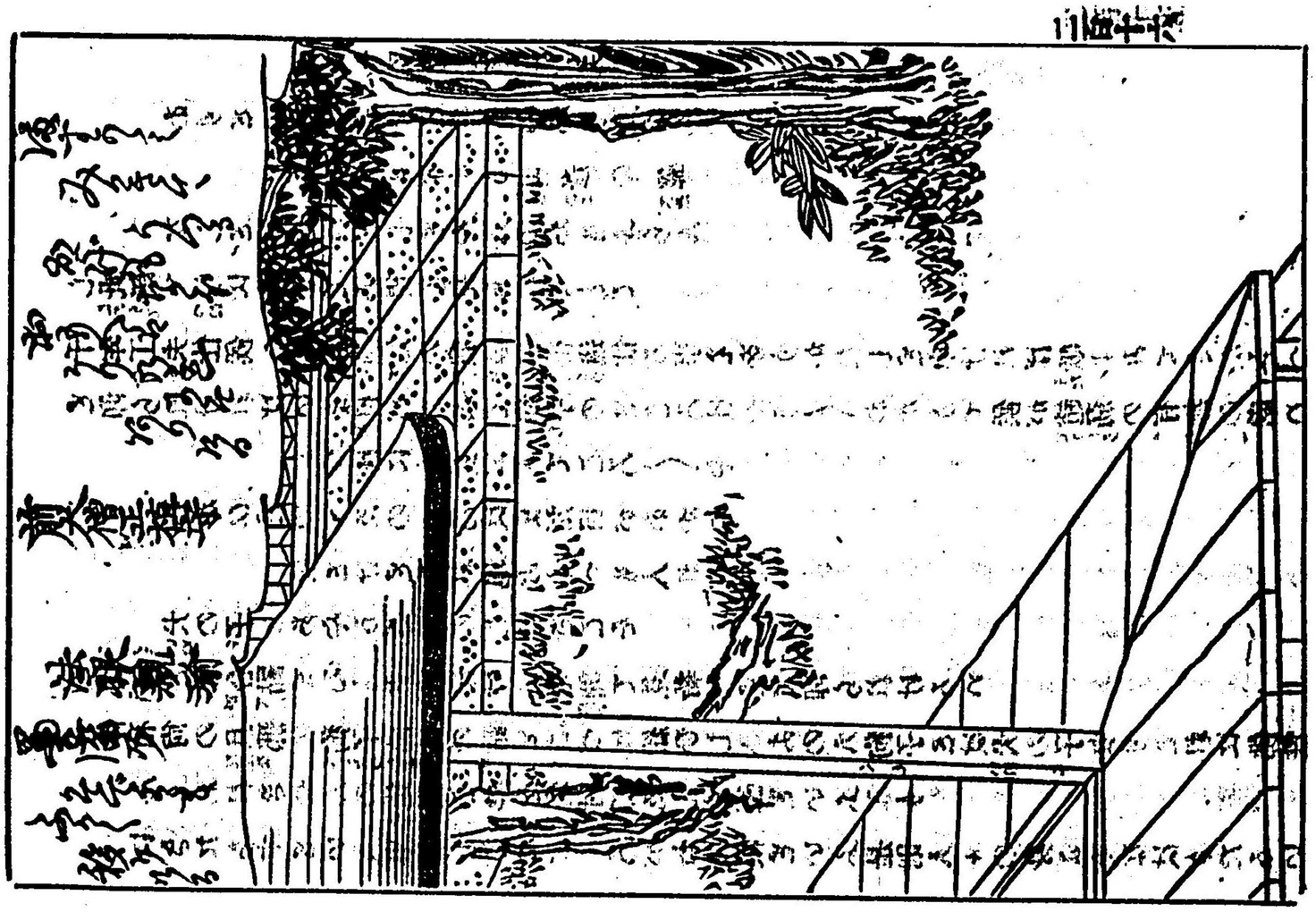
○世の中のよめがしうとめと早なれた人もはもけなるなはは[illegible]

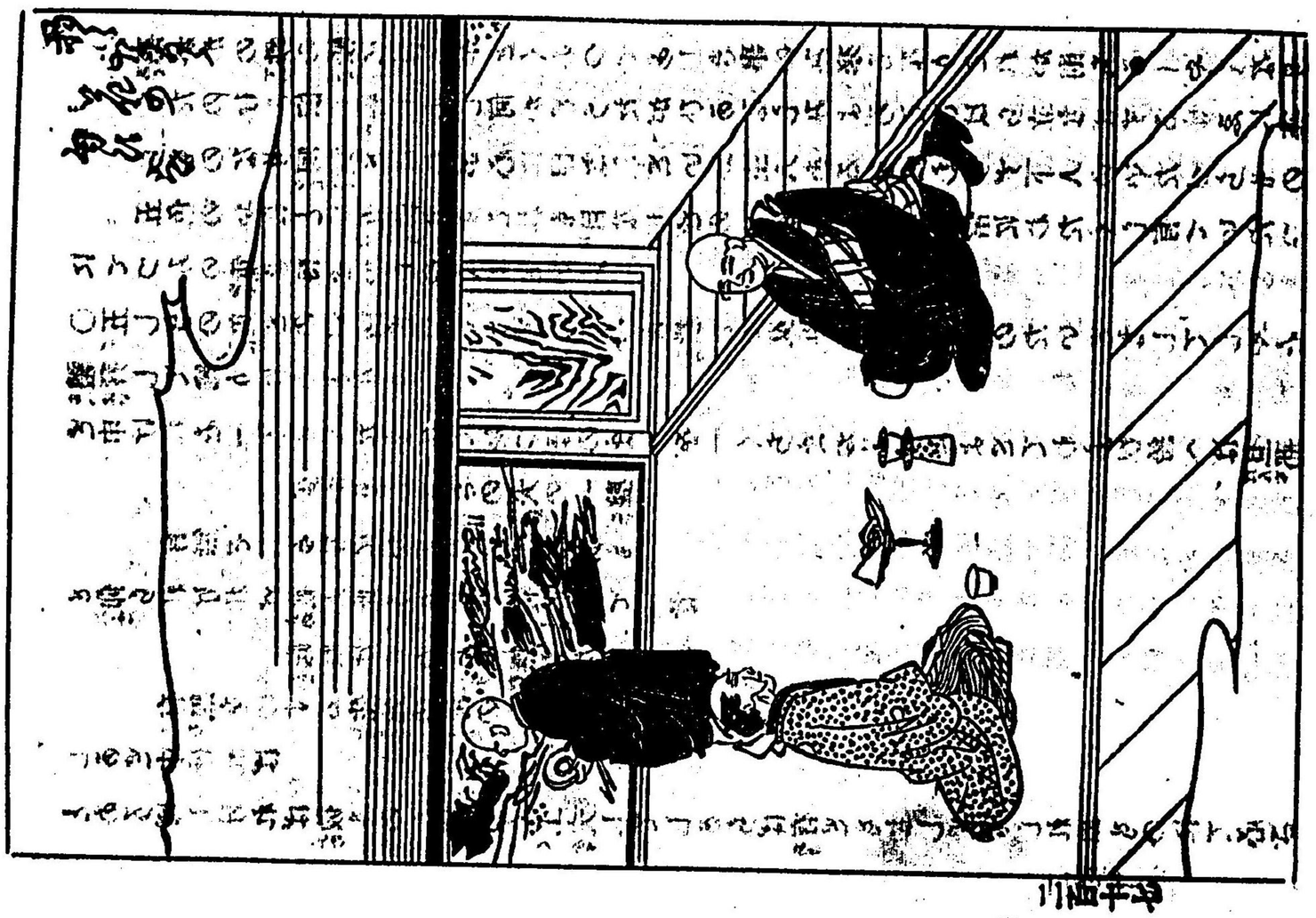
○たつなみもたへぬも同じ水なれば人も[illegible]とけになりやすき哉

○ゆく水はかずかぎりもはかなはは[illegible]とけをたのむ人ののちの世

○石の火の火よりも はやき隙とけめをたのむとなどや追手付べき
○うそとうき地ごくにおつる物なるばなぎとる事なしやかいかゝせん
○地ごくはむやかどのゝこゝろは經になきものをどうりをとりて地ごくにがいる
○とへばひふとはねばいはぬだるま殿心のうちに何かあるべきかは
○本来なるべつの事なきをといふものはやろむくつひにをひ白髮だるま一休
○世中の人のこゝろの佛まれたもやおやあみだのい性わたす哉
○しらざるはほとけ者人なおなじことまでとそ人のまよひをそすれ
○極楽も地ごくもこゝろにおもひをにうまれはさきの物なるべし
○たゞあるべくも地ごくもしあぬむゝろ故がどうしてけふをもとの身をたゞ繼よ
○人とぬるとはやはやきもせうづみもしのけをなくなる思べばまたなくならずもて魂
とゞふものの來世とやらんへ行おらおそろしやはんま王が手にわたりなば婆婆よりて後
罪おそくろ水桶の帳につけてかきて鬼に見せてこれほどの罪人なりおしやをせよ地獄
えんま王といふか目なしどのゝ第一の臣下なるすゞしもわたの知しなぶしとまて善惡
をかちたゝわかつなり能とをなせばあき事きたり又あむき事をなせばあき事赤る
きなりはやきかおそきの其むくいかたちよあげのしたがふがとく毛頭もゆるさずつひ

にきたらずといふ事なしこれとくろがねの帳といふ是則人々の身よりなはたるい
らくんくわれきぜんの道理これを名付てえんま王といふなり
体和尚の旦那に狗子佛性の話とさゞけ給ひしふるの人狗子とは犬の子なりこれに佛性
合點まゐらずと申けれを聞て見給へとて仰られける
犬の子よあやうる人のしわざこそ
ほとけとなれ地おくへも入れ
ひせのゝえのころはまだ目があかぬ
てつぽにまちと入てころくやう
と仰られければいま目があきて狗子のところはやう〳〵わかりて候が趙州の有無の當い
行年江夫仕候へとも愚知の我等は得道仕る事そおりがたしと申ければ歌よみてさかそ
し此歌と悟に得とて心得て見られよとて
なしとにへいなしとや人のおもふらん
こたへもするる山彦の聲
おりといはばおりとや人のおもふらん
こたへてもなき山ひこの聲





とあろばしければ彼ものしばらく工夫してしるらば有ともなしと考しれ如ものたて心ざしるると申ければ

有無をのする生死の海のあまをぶね
既ぬけてのち有無もたまらず

と仰られければ彼人此うたにて得心して一首

有無そしるなにおもひけん越後も
なかりしさきの犬の一聲

と申けれと一休きゝたまひておつぼのまゝを一くちまゐりけるよとてわもひ給へば旦那
礼拝して歸りけるとなり

○五しきの鬼どのが請どつてうすにてつき殺して又みよてひてあのたいとをしてしやた
にてつみの重きほどをかしやくすといふ

五色のおにとは五濁なりこれも目なしどのいけんどくなる常にわたくし有ていたつ
ぶんをたのひゐ依て善しあし何かとうたがひるなもみよろこばら立なるするゆゑに其
事がかの鏡の帳に付るかとくあつてあしき事のみ來るなりこれが則ち閻ーやくな

き大地ゝ多の人の此いかゆらもの、下人をたのむによつてくるしみとするなりたのむと
きは亡ぶんをわれ是をるといふ者なりたゝ主人の目なしどのをしらば過ゆゑ地獄
○またさるものゝ所ふには毒藥へ法じてくすりとなるといへば罪のかもきは佛にやなり
なん

ふ計ふ心は目なしどのにあふたる人は我すなはち自主なしなりと知ること勿を佛になる人
おらたといふ申り其人は經念佛難行などもなさず何の思ひもなく海の經念佛なども心なき
川は計ゆゝ此つみのれもきは佛にやならんといふりんぎい大師のいは造三五ノ無間
○三つ鏡二所得解說と云々五むけんの業とは父なるろし母と者ろも佛身は導師
いはゞ和合僧をやぶり經像をやくこれといふなり父母とは天地有無なりころすとは
亡ぶるをいふ佛ゝ經像もとも如ろしてどらぎ過なり解脫ぼだいゝ湖のまはひをぼ
ゝさけいなるゝをいふ也いふこゝろは修行の人佛ともとめ衆生をきらひ有無にかゝは
ゝる者は此世迷なりたれを智ころをはて、とらざる人と佛は成と說玉ふ釋迦三尊
○れもきは佛にやならんといふあり
○つくりおくつみのしゆみは色あるなちい
ろんまのちやうにつ射ぞころあし

ほとけをも鬼をもころすわくの人は
ゑんまわうとてゆるすべきかは

○よくものをあんずるに地ごくもとより遠からず
鬼といふは瞿曇なり一代聽經はみな人間といためんがためなりあちにてこの釋迦どのや
いろ〳〵のうそとついておわて
地ごくも身心にわりくどんは釋迦のかへ名也釋迦いろ〳〵の經を說れかるゆゑ
に地ごくのくるしみとうくるなり

○さて愛に頃しも八月下旬なれば大風大雨しきりよして洛中の家堂社塔もそこねければ鰐
川新右衛門取物もとりあへず一休和尙へ御見舞申て御坊御内は御さるか何とゝ迄の外
なる大風大雨御寺はいつくもそこね申さず候やと申ければ一休出合たまひてよく孔を御
必付候ものの名誠にあつちしき大風にて候去ながら當寺は何事も候はずとて

人わが宿ははちもたてずふきもせず
雨よもぬれずかせもあたらず

○さて御庵はいつくのほどにて候ぞと申けれと一休わちはさ給ひてされはち
と仰られけれと其御庵はいつくのほどにて候ぞと申けれと一休わちはさ給ひてされはち
そ大事のことをとれたつねあれとて

わが庵は都のたつみしかすむ
よをうぢ山と人わいふなり

と仰られけれはさてこそ喜撰法師と相住なされ候かとたはふれけれはいや喜撰法師にかゝ
て居る也とありけれはさては借家とのにて候かと申てわらはれしかは一休また一首をよ
み給ふ

かりの世にかしたる主もありぬしも
かすとおもへすかるとおもはす

とよみ給へゝ新右衛門此哥を感じて扇子にうき留かりろめに參りても得道の益得るとて
よろこひて歸りけるが門より立のへりてさて〳〵とかしこたはふれ事仰れられしにうか
がひ申べきと思ふ事を打わすれかくすでに歸らんと仕候此恐いかゝ必得申べきとて

吹ときはものさゝがしき風なるか
ふかぬときにはいつちなるらん

是申けれはそのまゝ御返哥ありける

吹ときはうべさわあしき山風も
ふるぬときにはふかぬなりけり

と御ものれければ新右衛門もあつまりいとうち驚きて貴く禮拝をなして歸りさとなす

○さて汝を誰といへばよしなのとはずがたりやの[illegible]

いま心は一休釋迦をたらふくしかれとも我もまたそでもない事をいふたとありなせ

此なれば經の文字の心ともつて迷ひをしらず何をもつて此精事をしらんや八方余經

千差万別なりといへども見佛覺知は四門をあつめて永遠四門を出ずとあり四門をあつめて

一はきれたると經の文字のとく義とをとりてみだりに分別させまじきか爲也しかるに一

向此經をすて見聞覺知の外に佛ともとめはまれ則邪見外道なり人の邪見をれとさん

事をおそれて又一休和尚みずからはよりこのとはせかたをやと遣ずなり釋迦をもあり

て也んもなき事といふたなり法花經に曰舍利佛云何名諸佛世尊唯以一大事因緣

故出現於世諸佛世尊欲令衆生開佛知見使得清淨故出現於世云々知見

とは見聞覺知なりとへれ畧して聞覺を不二說開とは見聞覺知を則佛即心の光影なり

としるをいふなり然は見聞覺知の四ツは代藏經の要文なり是をあずいて別に靈運

文藻潤飾をたとへは迷の人はあしき夢を見てくるしみかなしむがをくそれはかた

もなき事なりと人のいへども聞入ずもし又聞しり顔はして我今頓に夢さめてくちき

に灯を得るがをへにて万法あきらかに見るといふそれもひま充ねおそはて夢なり

よくゆめの覺ぬる人のいふは我はじめよりねむらざれば夢なしなんのさむるといふ事あらん其とく性德まよひおきとしるのみにしてかつて得るとなしかくのとくなるを佛知見を開くといふなりまよひの人は見聞覺知をはなるゝといへども一向に捨て外をもとむはなれずといへば又とりてみだりに分別する今爰に心見よとらず捨ぜの事をいふ夢のうちの人よくき、只榎木て作る土地藏がねごとをいふを見よゑひさらくと車の音よ目をさませ

○釋迦出山語云

出山とはせそん山に入六年端座工夫じゆくして明星を見て元來まよひなきとさとりて山を出たまふといふ也

○一佛成道

一たひ見聞覺知を自性の日かりなりと識得れば万法歸一亦まもらずかくの如なるを佛の妙道と成就すといふゆゑに成道といふまた佛の知見を開ともいふまた目なしにしなる人ともいふ

○爰に西此國の大名身まこりける今端のときに申されけるは我死してのち種々の佛事をもつとむべからず紫野の一休禪師を請して引導を頼み申せ是より外に望みなしとて死たりける人々なげき御遺言なれゝとて急き都へ使者をたて一休を請しける一休折節在庵不で易ぎとなりとてあの使者といもにうち連て下り玉ふ既に葬送れ日暮きはゝゆしかば者に聞べし紫野の一休和尚こう此國の某どの、御引導の爲とて御下向ありしとて國々島々より聞ほどの人足と空にまとふて貴賤くんじゆし御引導を聽聞せむとそひしめきける葬禮の儀式天には花をふらし地には錦を散て其よそほひ詞はのべがたく其日はなれば數万の見物かの一休の引導をゞ聞べけれとおじあひへ去あひける扨玉のこしをのきすべければ一休立出たまひ柩の前に一默し玉ふ諸人すはや今や〳〵と耳うばたてゐるに一言をもいひたまはず天と仰ぎ口をくはつとひらき地を見て口をふさぎて其まゝずつと退き給ふ彼大名の御れん中きん達をはじめ一門家來のともがちまで是はいかなる御事やらんせめては一句をしめ玉給はれと御衣の袖よすがりつゝ諸人の見物も興とさましければ一休の歌をよみをき都をさして上りたまふ人々是非なくその歌と見れば

我はたゞ後世のれしへとしらぬなり
あらんの一字のあるにまかせて

とありけれは智人これとき、てあともうんともいはれざる御情かなと默して感とわへりしと也

○又一條堺へ御下向のとき淀の河瀬舟に乗たまひけるゑ乗合ゑ山伏ありける御坊へ何宗ぞと問ふ一休われは禪宗なりと答られければ禪宗には我等が法華ぎやくはあらむまゆひける一休申さる、はいかにもきとく多し其方に何にてもきやくあらた見せたまへと仰られけれどいで我等が法力よて此船のへさきゑ不動をいのり出して御目にかけんとて一にとん被ゆゑ三にせいたかをはじめてもみゐもんで祈りければ皆々のり登のものども目とめを見合ゐるところゑゐんのとく舟のへさきにたちまち不動の像火ゑんをはなつてゐゐは首に身其時山伏ちうめんと作りおのゝくおがみ玉ふゐも申ければ皆人ふしぎの思ひをなす中にけれ共一休もさらにふしぎよもましまさぬふりなりいかに禪僧かゝるきどそは如何に為玉ほんとせぐりかけて申ければ我等が奇樂には身まり水を出じてあの火焔をはなつる動歟をけして見せん隨分いのり玉とてかの不動の像の火ゑんゑ小便をしかゝかしゐけ玉へ巻煙をそのまゝきゑて山伏の法力つきけれ皆人一休を拜禮心で奇異のおもひとなもけるゐ也さて舟まり上り陸路をうちつれ行處にむかひよりなる法師なる武ゐ山河にもひゐ玉ばかりまほべのまりければ山伏申やういかゝ御坊さきの行くらべにこそまけたゐ也ゐ問おうるもき犬のいかりを止めたゝ今是へよび寄る法力をあちはゐんが御僧はい御歟と申はる一休是はいと安きとなるまつ祈りて見給へとのたまゝ部山伏大いゐ為者の赤本の珠數をさらさらとくくとおしもんて一はのりこそ此のりけあゝ貴犬はゐゐやまゝ手元へ来るねんもなかりければたつさまやよこさまかけて十文字犬のゝ法きゐめよゐあひゐゐ依ゐんもわかくといへどもいぬはゐやまず一休をかしく思しめ四方をのゐ綱へ某はそれほどの事にあひらうんはんもそわのゐ人事にはあらずあのいぬのいかりを止めたちまちこゝへ來らせんとゐどころゑより畫飯のやきめしをとり出しの犬に一目見せてころくとのたまへはさしもいかれる犬なれどもやきめし一目見てくんくとて尾をふり來りければ山伏ゐきをけし皆人さても格別なる心得かなと感せぬものとそなかゐけゐゝ

○觀見法界草木國土悉皆成佛

いと心は釋迦目なしどのとなり得て天地萬法は觀見ことくゐみな目なしどのなり

○草木さへ佛ゐあるとなれば人間はいふにおよばずむかし皆あつ丸釋迦阿彌陀ゐみ菩佛じやといふたしたがうそをつかれたとのふ

いふ心は釋迦目なしの事を人々にしらせんとでひもれたれども見聞の人其心まゝ

○言じで言葉のぎりばかりを取によつて一言葉も目なしどのよいひあてられされは皆

也そ也又有もの、いふはうそをいはずは佛とはせじとなり方便のうゝは皆實なる故

○うどゝもまゝものりの壁

されはとて詞とひとへにきらふにもわらず風のこゑ水のおとまでも聞めあしをあ
はずなり人のとばにてあゞ別ならん其外身にふれ目に見耳よきくなどの事天地日月
うみ山にいたるまで一つとして法の壁なきものなしゆゑにうたゝ法のこゑとなる

○柳はみどり花はくれなゐ

いふ心も目なしとのひとりよて能それ〳〵品々に別るゝなり自由なるわざあるもし
わからずして一めんならば目なしとはせし善惡なくしてよく善惡をわかち萬もとの
にれなれて萬物とゝもなひ分別なふして能分別し見聞せしで能く見聞されなにせゝ
なれば目あしゞのゝ生國無住の國の人なれはなり

○あら〳〵もしろの春のけしきや〳〵

目なしゞのゝけしきもしろきとなり何の心もおさかり

○本來生死とはなれたる身なれば來る處もなく去處もなし三世不可得なる妙へ某おさ
三世とも心のいまだにごらぬ所と未來といふれどゝ又た心を現世といふなりなる心
を過去といふ是と三世といふ不可得とは文字心得べからず實とよび心のをゝ花仮ら

○先を見るに何ともしられ又おこたる心もれごらぬ先の心を則し事なり是ゝ三心を明
しらぬ心也是を不可得といふなり云心は三世ともにしるとも知らぬとも何ともおもひ
いからぬ不可得のこゝろのかはらぬ心なり是を目なしといふなり三世たゝ一心と成

○混沌のいづくともなく出ぬれば

おゆゑに生死もなく本來今もなく來る所もなく去所もなし

混沌とは天地いまだわからざるときなり是則識前の心胸なり此ねをもつて平常つる
ひ用るなり是をこんとんのいづくともなくいづるといふなり

○父母未生いぜん本來もなくゆめ〳〵佛法とやらんいふ事もしらず何よならんとあんす
べからずたゞ何おとともしらぬ心が佛なりその佛といふものは有にもあらず無にもあら
ずさとりぬれば有ともなきとも知らぬ事なり一切八万余經を見るよ佛とならん心はす
べしもなしとかゞ古暦なゞゝ同し事なり

いふ所のこんとんの一歩と得れは未生已前本來もなく萬々佛法といふ事もしらずた
ゞやすらかにしてひとりしづかなり爰にいたりて一代藏經を見るにみなたはことの

日記なりゆへにふる暦なゞゝ同し事とゝきたまふなり

○愛ま一休和尚の末期の句とて世の人の日にまかせけるはろの數多し是が實なり是ゝ虛妄

○夢といふも不實なりといかよとならば彼も御影を書付て贊ともゝめてれを贊をもまむ[illegible]
贊には出るまゝ〳〵あそばしけるとなりある處の御影の贊ゑ

朦々而三十年　淡々而三十年
朦々淡々六十年　末期脉業拂地天

此句、ゝもあり又の語には

借用申昨月昨日
返辨申今月今日
借量〜五つのものを四つかへ老[illegible]
本來空にいまそもつ〳〵[illegible]

又ある末期どやちんゑ遊しけるとて人のいへるは

○[illegible]
生也死也　死也生也

柳は緑花は紅

○[illegible]
柳は緑花は紅なひ[illegible]

○[illegible]
柳〜不レ緑花〜不レ紅　御用心〳〵

○又ある人二休の御寺へ用事ありて參りけるが或夜[illegible]二休の御[illegible]

言ゆゑもてかがみ侍しよ一ゝ名譽と極めたる事ども多ありしも中にゝ自畫自讃の御影ゝ拜し侍りしにかうべいいかにも長頸よして眼をさつと見出もうさゝ赤き衣ゝゝ[illegible]杖をつきいすにこしをかけ侍りし贊に

柳は緑花は紅
行脚事畢今日暮[illegible]
折二主丈子一　爛二六月雪一

嶽堂之再來天下者和尚一休宗純末期ノ書レ之

○又ある書家に所持せる自畫自贊と拜見せしよ是ゝ蜷川村の卿庵に居ませし頃にや是も
[illegible]くまし〳〵ましゝ草にかゝり玉ふ山居の御影なり

山居窮僧聽二松風一
不レ須二臨濟德山禪一
一箇住山三十年
公案工夫了畢後
松風破睡眠

嶽堂七世孫壹門客東海純

一休老

とゝ有けれ見る目もさましくて身の毛もよだつ事也

○はしなふぞ雪のそらへはあがるとも
　ぐどんの經をたのまれやせん
　　きやうを見て其よしあしとゝとりぬれば
　　せんあくともよわくにころなれ

○ちやかといふいたづらものが世に出て
　多のひとをまよはするかな

　人はみあだうりをのみよきぐものを
　　いはねばしやかのきやうなりけり

○是こそ是非こそ非よしておき生は生死は死花は花水は水草は草土こそ土
　千境万物名をかへかたちをあらため出きたるといへども頭ゝ常體是にして是のだう
　がなし故に生は生死は死花は花水は水草はくさ土は土にしてかつは譬らずけしはと
　もあちこちひあらばこれ佛になる人なるべし一休和尚は何にもならぬ人なる故に是
　は是非はひと戯玉ふなり是人ゝ生れづきの平常左右のところなり一休和尚の水にも

○かぎらず雖かくのごとくならざるものあるやしんぞひて親常色遠原去て見てさらに
　うたがふ事なかれ

○あめあられ雪やこほりとべたつれど
　とくれ物ふなじ谷川の水
　　あめあられ雪やこほりをそのまゝに
　　水としるころとくるなりけり

○我は是何ものぞとゞちやうよりしるまでさぐるべしさぐるともさぐられぬ處は我なり
　我とわ迷ひの身心といふあらさぐるとは此身心い何ものぞと根源とさぐりきはむる
　といふなりゞてうとは上諸佛なりしりとは下衆生世界なりよくさぐりてみればさぐ
　らぬ先には色身のありども無ともしらずだゞきのきれおぢの如くなりそこよてあつ
　しつめた玄と直に境よ應じ事を弁じてみちんばかりもさまたけなし是さぐられぬ處
　也うれが則平常の身心本性の我なりとしる是を名付て目なしどのといふ也此故にさ
　ぐられぬ處なりといひ給ふなり元より色身の身よもあらずたとへは色身は樹の根な
　り諸法は枝葉なり本たつて末あらずとひふどなしゆゑぶ先色身といふなり心理にい
　はく色即是空空即是色受相行識亦復如是云ゝ色とは色身なり空とは本智なり即と

は其まゝあり受相行識幼心也いふ心は身心ともよ其まゝ取も本ほさま本智なるもの
識論ふ古人是を心經の要路といふ也是即ちさくるともさくらるぬあてなるを我なりと
いふ詞と同一言なり

○心をれいかなるものといふやらん
すゝ繪にかきし極風の音
ふたつなきものとなりて一もなし

すみ繪のかせのさてもすゝきかな

死ぬれば空々としてあるやらん

○またほう〳〵としてなきやらん
死ぬればとは識は死るよはあら玄目なしとのふあへは真なすこと思ふと色か
たち音聲を〳〵く昔目なしとのゝわざにて少も心なきなり心なきが故に死る
といふ也目なしにはよく成得れば爰ものしても昔目なしにて分て目なしといふ
べき方もなしゆゑに有やらん無やらんといふなりいつこうよしらぬ事にてい
ふにはあらず

○わかのみもなしとひとつのこのみにてくらにふたつのわヒ[illegible]

ありなしとなに名ゝかへて思ふらん見れはひとゆのとのみなすけり

○ゆのれさへあつさそらはぬ不動めがあくまかうふく無用なりけり
あや変りてふたうとよきとおもふなよ其心をそわくまとはなれ[illegible]

○蓮きあどのかた見よ石がなるなちほ五りんの代よちやうすきれかし
人はたゞ五たい五りんに化さるゝ五つ之さりもりんのみにせよ[illegible]

○朝つゆはきあのこうてもあぬべしたれかこの世のことはゆさ〜
いなゞ之のかげよさきだつ身をしればいと見る我にあふ事もなし

○はあぬ井にたゝらぬ氷の波たゝてかげもかたちもなき人そくむ[illegible]
うそをつきうすとしらするうそをはこれをまをのおるまことかあ

○闇には見て手にとられぬ月のうちのかつらのおとき君よそありける
とれは得ずすきてはやきは矢のとくひきかへし見よゆみはりの月

○萬法を見る人ことにのどかわきおもむて水を一くちにのむ[illegible]
四つのうみをたゞ一口にのみつくし今そしらるゝものとあしをひ[illegible]

○釋迦さんのいの慈よまかせて佛おなるといふしるをなしとおく不明なる死れば我る
なゝ人もなしゝやかみだも見れもとは人の性とうけつゝ地獄に[illegible]

きんのいとはいろ〳〵の法と立さまゞゝの行 法戒 行なぞする事也死すればとは悟れば也いふ事也ゆゑに我もなし人もなしとなりいふ心はさとりて後きんのいの法をみればそでもなひ事なり釋迦彌陀もゝとはよく目なしどのに成得ずしていろ〳〵のきんかいとして地おくにいるといふなりたゞ人々に文字をとり苦行なぞさせまとき

がためかくいひたまふあり

○夜もすがら佛の道をたづねればわが心にそたづね入ぬる

いかなれたたづね〳〵てをく山の道なきかたに安くいるらん

○をもひいれは人もわが身も余處あらずこゝろのはかにこゝろなければ

かへりつゝまた立かへりよく見れたおもふこゝろもそのこゝろかな

○心とてげにもこゝろはなきものをさとりゝ何のさとりなるらん

さとらぬもさとるも同じまよひなりさとらぬさきをさとりとぞいふ

○何事もむなしき夢ときく物とさめぬゝゝろとなけきつるかな

さめぬればさめぬさきとうさめつるよさめぬこゝろのなぞゆめならむ

○わか法をいはでもいらぬ春のはなもひらけてちりてつちとこうなれ

春くればさきちる花もとくのりをきのぬは人のあるゆゑぞうき

此本歌は文の終の言葉なり佛の常樂我淨をよめり是一器の流通なり我とは我淨なり法とゝ常樂なり歌のこゝろはこゝもかしこも我法なるゆゑにいこでもいらぬとなり春のゝなのひらくもちるもつちとなるも皆常樂現前のところをいふなり

○一休の御こゝろざしをおもひ見るに寒山子の風相にかはる事なし寒山師の詩句に

我心如二寒月一　秋水清無レ底

とありしが一休の道歌よ

我こゝろそのまゝほとけいきほとけ

なみをはなれて水のあらばや

とよませたまふこれ寒山子の詩の心なり寒山は文殊なりといひ傳へしゆゑ一休ハ定めて普賢なるべしされば狂雲集に其詩文多しといへどもたゞの人の目よは見へぬとにへゝて其中より金つんぼの耳へも入やすき詩を書ぬき盲の目にも見あさらむへきひらかなにてしばりつゝ子供にも覺へさせ大人にも未だしらぬ人に見せ侍らんとかたことかへりみず仄平とわきまへず人の書あやまりをもつてもがあやまりとす我あやまりても苦しゑらずかくなん出しぬ

題二鉢蔵一

豊不レ笠分夜不レ茵
瓢簞叩罷有二何益一

題二影法師一

完來有物不レ離レ身
全躰分明無二面目一

彼岸

今日彼岸欲レ閉レ鉢
無レ裟無レ笠又無レ杖

稱法師

往昔江南浅落時
欲レ問二横斜疎影古一

虱

襦臥寒衾忠幾千二
夜深欲レ被二牢風食一

東西南北自由身
花發十方浄土春

揚レ手同揚伸レ足伸
起居動静似レ僧人

餘身貧乏雨晴稀
結句食レ犬引レ腰皈

起二精進心一成二法師一
伊蒲塞壺底噴嚏破レ眉

余身貧極有レ雖レ僧
天至二晩鐘一来作レ眠

一生恐レ乗二芭蕉身一
入道修行若時事

光乗有レ日更無レ言
一切衆生迷塗所

紫讃線壁冠二沙嚏一
若有二貧僧一愍志一

八寸推レ根倚レ勝人
須曳老去革頭巾

百億毛頭擁二丸痕一
十方諸佛出身門

況忌二御年十二三一
寮前吹味致二推參一

一笑の紅顔花似レ開
嗚呼是此玉瑕説

搭切爭可レ入二御意一
山僧風流只文字

其二

少年千五月如レ出
水石無恐多二匿影一

君乗天然好二富貴一
無レ酒無レ茶又無レ餅

贊二見文殊一
看書忽忘七佛師　雲鬟霧鬢少年婆
手中經巻是何字　定有愁人小艶詩

贊二阿彌陀一佛一
汝是桑願一人不救　我無一願
萬民不泄

贊二大黑一
大黑奪天其面貽　諸人信仰擱棚陰
平生愛鼠是何事　足下米囊無用沁

贊二布袋一
菩提煩惱睡裏乾坤　寐寤恒一
佛無鹽言

青地扇切箔
本異白物染青々　日本晴時如見星
又有假茲夥出事　宇治川畔亂飛螢

○八島之壇浦合戰圖
○射手名人能登守　兵法達者源九郎
○秋風有恨八島浦　狼藉忠信亡菊王
○一谷合戰圖
○萬騎下山源氏兵　平家運尽出堅城
○長江不洗英雄恨　日夜風濤戰鼓聲
○源九郎流弓圖
○漫滄波已落弓　恰如初月掛晴空
○忽伸左臂取來者　天下英雄在掌中
○熊谷招於敦盛圖
○生年十六美男見　身命碎珠同馬時
○熊谷道心從此發　法然庵室念彌陀
○佐々木四郎宇治川先陣圖
○萬騎如雲宇水邊　東關諸將各爭先
○功名誰出四郎上　一馬化龍何着鞭

右

休和尚往生歌臣首とて

○阿彌陀佛さまれは即ち去覺不遠まよへ は海の民しにこうわれ

○三國の法はしな〳〵多けれどしやかのをしへにまされるそなき

○佛祖道王ッのをしへの別ならず善に善報あくに惡報

○むかしより知惠ある人の佛道成二世あんらくのとしへとそなる

○三ぶくの世々のかしこき君臣にしやかの教しへを仰が越はなし

○三寶よ歸依する貴々のためしあよこく土あんとん土民福樂

○一心にまと專道にいる人のその行すへは子孫はんじよう

○公家武家のほだい信する手本はかまたり大臣多田の滿仲

○道心いきすゑはんじやうの例よい藤氏源氏の家おみてしれ

○せんちやうは忠孝多むとんせいはげよたゞひなきわかきもの、ふ

○もの、よのとんせい修行手本とて西行法師さてはいまがへ

○今も又千編氏素の友がなしろさんのひか見ともはれずそる

○とんせいは不過の人はさまあらり名とけて風だい入はうどんげ

○大唐の如禪禪師と樂天はともに念佛座禪とそきくこと

○藤谷がとんせいしゆ行功德みよをんしん平等自他の成佛

○四大五蘊みなくうにして申こそまことの念佛座禪とそいふ

○家にあり不忠不孝のともがらはとんせい修行わやしかり味る

○成佛は異國本朝もろともに宗にはよらず必ずよるべ

○をや主に忠や孝ある人々は家にありてもぼだいたのもし

○高法の行はよろずの事なれどこゝろ道をつとめよ

○世をのがれ修行の道は別でなし智者愚者ともに座禪念佛

○貴賤知愚僧俗男女別なれどぼだいの道はひとつ事なり

○佛說はぼだいねはんの眞理にて三世安樂のをしへなりけり

○善惡すれどもあく事きたると惧なよ先世さいがう即爲消滅つ

○智人のねはん常樂しらずして生死無常をなげくわはれさ

○佛祖に定業のがれ難ねはいやくいんぐわいのひくふ幸

○佛性は不生不滅の物なれどまよつて生死流轉とゞしれ

○銅鐵を定業なりといふ人者さとのときはをどろきする

○佛道にさとれといふは何事をいふぞはぼだいを得さくする也
○よの常よ工夫観念つとめなさまをのときふ心うごかじ
○知恵あるは若も道をつとむるに老てぼだいをしらぬおろかさ
○人はたゞ平生志願なかりせは修身齋家もいかゝあるべき
○何事もぜんせのがうといふ人のぼだいつとめぬこれろ猶ぐち
○我等今悲願所誓をするをみて有爲の法とてろしる佛陀や
○ふくとくはねがふに來るわざわいはつゝしむのとゐ入ぬとゞきく
○一さいの諸ぶつぼさつもひぐわんよりぼだいねはんの成就し玉ふ
○一念乃中よりまよふ雲おこりりんゑ永劫やみちとぞなる
○つら〳〵とめうりもともむる人みればじひある人は佛ならまし
○神儒佛みつのとしにとく人の何れの道もいらぬわざまし
○一念のじひ眞實ぞたねとなる九品はれんげひらけこそすれ
○よの人のねんぐをぼだいをしらずして五ざやくのつみとつくるあれさ
○飛たもちざせんねんぶつつとめつゝじひある人は佛ならまし
○比丘〳〵の其身のつみは扨かきぬ人の道心やぶるうらめし

○當來の三會のはるの花ぞまた現世のじひぞたねとならまし
○世中よ我そさとると自慢して名利もとむる人のれほさよ
○正法の花ぞの、山の草や木をむかしのはるとなすよしもかな
○名と利とをもとむるとのくげんやな人よつうはれさいにつかわれ
○今とても天地のみちのこのはらねばまつせのわれらぼだい願もし
○財實は身のわだなりと聞ながらなほもとむる心はおなさ
○釋迦も又あみだも、とは人ぞかしわれもかたちは人はあらずや
○あくねんはおこりやすくてじひしんをおこしがたきぞものうかりける
○道をたゞせけんせ外のどぞもにじひしんじつの人にたつねよ
○おくらくもちおくもわれにあるなればあぐねんれこるこゝろせいせよ
○わが氣にはたとひ入ざるとなりと人のいさめを用ひしたが人
○人の非はしり安げをぞたのが非は智者もしることのたきとそ聞
○なにをも人のこゝろにさかふまそ世法佛法さわりなりけり
○身を入て鳥けだものと救ひじひ釋迦のいんちの修行なりけり
○眞佛は有さう無相ぶつゝわらす四相なきこそひさう成けり

○ぼんのふをそぐほだいをさとは二ねん廻向そのうちにあり
○貪僧して物とりくろふ沙門ころこれぞちごくのかすとこそなれ
○本來のむしん無さうの佛をも五よくにひれればぼんぶともなる
○われいなる沙門とみれど皆人のわが身がしやなりといふぞおかしさ
○財あり貪てばんぶつこゝろのなかり世は本らいくうのむさう眞佛
○いまどきの僧は中々俗よりもゆんくはぼだいをむらぬ佛たちなり
○禪行もち座禪念佛つとめでもこゝろあしきは造地獄からなり
○儒佛道おしなはたとひ得せずとも生死大事とおもへ人よ
○物とに執着せざる心とそ無さう無心の無住なりけり
○曾眞阿れしへの道にまかせなば本來空さあべりそ
○みな人のとんじんぐちの惡水は三ぢの川のながれ
○生は寄死い歸るぞといふとはふるきふみにそれはもみへけり
○六根につくるざいくはのちかほとり四手の山路の高根とぞなる
○たひはたさうき物なるにふる里のろらにかへるをいとゝはかなさ
○師業の月まつ夜半の念佛やくもゐりはろふ秋の夜し風

○障なく本來空もむへるまろとれ西方往生とも
○老の身の月日をかくる所作はたゞ香花にぞくじゆ座禪念佛
○西方の本來空ゑ往生しむりやう尊佛となるゑめでたき
○口ほとに身の行ひのならざれはわが心にもまちられろ
○わが禪わかしえの外の宗なるに往生要歸よもれ
○わが禪にさらふべき法あらざれとこゝろのうちは一もつもなし
○いまとへのちしきのをしへひとのみいまはなにとてがまんは
○まやはたらりいたいけ夫人極樂へこれぞ佛のわうぎせの
○佛性を四大和がうの躰なるに五欲のちりをいるゝ引けん
○佛乘をせち弁僧やわる知識匪わたるものをまるをかなしさ
○地にして神あるものはこゝろ說天地にわたりみをんよもいる
○不義にしてあつめたくわふざは實はつもりてのちは二世の身のあだ
○心より四聖六凡いでぬるに何とてわたしゆがうは作るぞ
○名と利とまかゝはる心引かへてまとつくさば二世ハ安らく
○何をも今日の觀樂すぎぬれば明日はのならずくげんとそなる

○書寫寺の僕のあろもの虱どりむあしの御僧今うこひしき
○現在の苦修善行ぞ種となるかならぞ來世安樂のいれ
○をしへなる道は世外ゑ事多したゞーん實ふ慈悲をたずねよ
○罪障の露霜ふかき身にもたゞ座禪念佛題目ぞよき
○まつしまやみなみの海も極樂の池水と同じ法の陸奥
○十方は唯一心の淨土なれ衆生もつとめ己身彌陀佛

巳上

眞珠菴は末代まで出世すゝからずと仰られ和尚自の一代にも出世めまゝさゝりけれども出世の法語ども名譽なるを書留給ふ和尚号ゞ贈号なり自のたまゝは虛堂の再來なりと其外ふしぎなる事を書おき給ふ事多し又遺言のおくに我死て百年すぎて唐土より禪師きたらば我再來とおもへまた二百年にあたる年我死骸を土よりほり出し見るべしもしかたち朽たらばいひ置し事い皆たはゝとおもひて火中すべし大かたは死がいとそおねまじとのたまひしとなり然るに百余年にして隱元來朝なりこれ相違なき隱元和尚は一休禪尚の再來なるべし〜からば御死骸をとても定てかわり給ふ事あるまじきなり又今の御木像はゝるかのゝちの作物にて諸旦那あるひは弟子衆まで一休和尚の御そり髮を守袋に納もちけるが彼御像を作り奉るとき御長髮の躰なればもとて直の御刺髮を御眉御髮よりたるまで植付るとなり さても御刺髮とする忌の代の我〻拜し奉る事有かたからずやさてゝ集めぬるに昔の眞切書誤るも聞たがへるも有べけれども今またつたなき筆ゑ記したれば眉あやまる事も多からめこはわがたろかなる故ぞおしゆるし給へ必しも古人とそしり給ふべるち予此書は見畫がむる樂の伽となし給はゝとのゝから耳底のかすともならばあしきるずれもわちざらめかしふるろかなる我も筆記せるまに〳〵にでれる心のちりさへひとの三ゐは吹そらひ一休和尚乃かす成ともとれもふがまゝに

鬼の目ゑなみだい何の涙なる
ちおくの釜の下がくすぼる
みがけたゞ力ごぶしに實を入て
地獄の鬼ゑまけぞ歸るな

源　基定補正　平田止水居士識

一休諸國物語圖繪拾遺

薪村酬恩庵に事

○一休和尚いまだ若くましませしとき山城御見物のため大徳寺と立出たまひ南山城たきゝといへるにいたり給ひしに古き寺一ケ寺あり寺號酬恩庵と申しぬされども此寺久しく絶て住べき僧も無ければおのづから野干の住家となりてふるき苔は壁を閉ちひぐらさ軒をおほひつゝ物すさまじき有さまなり所のものども集り申けるはいくさまであれはて候はたゞ住へきとは思へる僧のなきも尤なりしかるべき僧もあらはまねき此寺へすゑ申度と彼やとれやと所のものゝつゝひ來り申ければ和尚つくゞくと思し召さても風景といひいかゝもをしき寺なり我よわたへなば住れはほすべしとのたまへば里人言葉とがめて是ま所柴が為といへる僧達六七人もいろゝくとしてすゑ候得ども或は夜のまに身まかりまれ心行術こゝろなくなり種々のあやしき事ばかり多ければいよゝ里人とても衆徒や行者ふ思議なれはて、候とかたりければ一休つぶさに聞て苦からぬいとにも魂往かはすがしめれへさよとゞ仰ければ里人ども口々よわかき御僧のいらざる事をもひ給る宋にもいとやすく願望叶おきとて年よるべきとにはあらずといふる者もありけれはしかるはは貴僧は住かすべし

と申ければそこあしとき御覽あるものゝ住ゞと覺ゆるぞきてやがて母たまふ在所のものどもこれをきゝていよ〳〵これまであやしきことの次第をのこらず申上ぎまゝ〳〵制しとゞめ申せどもたゞ我にまかせよとのみ仰たまひたゞひとりすゑ〳〵と鬼滅てたる古寺のまはちなる法其夜ひすがなる燈灯をのぞ便にて夜のふけ行をまちたまふをゝ子乃刻はありとおぼしきとき寺のうち震動していかびかりすさまじく鳴るみのまま計して年の程は二八ばかりの女のはも容顏美麗のすがたにて忽然とあらはれた一休の御前は近ふ歩行よるすのとき和尚そこしも驚ぎたまはず大かた必得たるゆそこを去よまめたまへばおをなく消うせはしたらくありて同じ年ころの見銚子かゝらけ要持そ先夜まひに候酒をすゝめたてまつらんをたわふれて御ろたに遊ふあゆみまる一休歩しもおはさろ物せたまはおさいぜんのものよ又來るあるとのたまへば是も同じくきへうせはまあ歩すあうろほきなくすでに丑の刻ばかりなど覺もき頃寺内ゆるきさわを稻びかりせすゝすさまじくぞたけ一丈ばかりの法師れなてはまうだんを病ものゝ動きかはなて眼は朱をはりたるみ如くおそろしきありさまにてひらり〳〵き飛めぐり佛壇の下をしきり此度ひらゝみなかめたり一休得と御らんして三度まで來るとあぞれろかなれはやそ主殿へ歸れほどのたまへは早ものきろうせはほどあくはのゝ〳〵と夜もおけゝれば在所めものども大勢が

さそひ合かの寺へきたりさてもいか成一休とて定て變化のものにころされ給はんとその
むさんさよと念佛なを申て一町ばかりもへだて、ふるひ〳〵和尚はれはまゐりの一休坊
やわたらせ給ふかとくち〳〵よよば、れはそのとき寺の戸ぼそとひらき門の外に出たま
ひければ一度よをつとのんじつゝしはしいなりもしづまらずさて和尚樣とたよりにして
皆々寺へ入にける一休のたまひけるいまづ此寺をくづし佛檀の下をふかさ三尺はゞ一間
四方を堀で見よとのたまへば在所のものども申けるわ仰おて候得ども此寺わ年久まきる
承候殊に故ある寺のよし申つたへ候得ゝこぼち申さん事いかゞと言葉をそろへて申けれ
は一休聞たまひさほををしく思わば此寺をくづし其あとにいかなるがらんとも我建立そ
へじと仰ければさらば仰よ隨ひ候はんとて人々あつまり寺をくづ〳〵佛だんの下を堀て見
ればどがねをつめたる壺三ツまでほり出さける其金を一つぼい地頭へ進上しひとつは所
のものどもへ取らせたまひ殘る金よて善つくし美つくさたる堂塔と建立したまひしとな
り地頭より酬恩庵と大德寺の末寺と定められて此寺に一休和尚住せたまふ事とし久しう
ありける今の世にいたるまで一休和尚の御隱居の寺と申はやむさるによつて御眞跡靈佛靈
寶あまた有ける山城大和奈良までも眼下に見はたし絶景諸人の目とかどろのし好士のも
の遊きをもいとをしず歩とはこび春はは秋もみちあるひい松茸がりなどゝて群とをも

けるとかや

地獄の問答の事

○一休かひのくにゝしばらく御逗留のうちに地獄などゝいふる高山わり古跡も又多ければ下
見のために立出たまひけるを所乃地頭かねて當話よき事をき、直よ聞まはしくわざとも
づかの供まはりよてしらぬ躰おて近く行むかひろれなる法師よ地獄極樂はいかにと問ひ
ければ一休まなこに角をたてゝ糞をくらへとのたまひければ地頭もつての外よ腹をたて
よくき坊主の惡口かなものないたせそいましめよと下知すればかしこまつて若黨ども走
りよつてさん〳〵に打すへ高手小手にいましめければ一休自若として地頭にむかい是に
ろ地獄よとのたまへば地頭心つきあはて、馬より飛下り手づから一休のいましめをとき
てさでも有がたき御教化あなと禮拜し則わが乘たる馬に一休をのせまゐらせ私宅へとも
なひ歸り種々の珍味とそなへ朝夕ろうたと離れず馳走いたさるれば一休これこうまとの極
樂なりとのたまひけるとかや

文字御頓作の事

○一休和尚御養生のためとて常に粥とまゐりけるところへ長谷川與吉とて小ざかしき男參
りあはせて御相伴いたゝさて〳〵和尚さまへ此かゆよ付て御尋申上たきは此かゆと申す

文字は南わきに弓を書き中に米といふ文字と書よは子細こそ候わめ我等ふしん至極にすんぢ候そもかゆと申すゆは水の中へ米と入れしるくやはらかよ焚たるをかゆと申なれば

さんずゆに米をかおるひは食篇よ湯など、こそ書べきものよて侍るよいかなる子細にて粥やうに書申やらんと尋げれば和尚こたへて宜く此字は子細こそあれ昔大唐に神農伏羲

とゞ聖王ゝはしけゆ其頃迄はいまだ文字定まらず米食などの文字はあれども粥といふ字なかりしを伏羲神農其外あまた聖賢たちゝ集めて米を水の中へ入れしるくやはらかよ煮

さ粥もれば腹中とゝのひて消やすきものなれども此文字いまだ定まらずいかさま書べきやと有けれども何れもわたまをかたゞけきまゝゝと思案し玉へども思ひ出し玉まゝ

ば案じわづらひて発ゞかゆと焚て人々にすゝめ玉ひけりされども誰あうて思ひ出し玉まゝ

されば神農すづはものゝ上よ箸をからりと置せ玉へば弓のやうに

かくのとく見えたりさてころあて南わきに弓を書て中に米を書なりとて

たべ玉ふ奥吉手を拍て申げるゝ夫晴御とんさくにてましますいかさまゆ

○茶水き事にては候まじ何を御たつね申上てもらちあけ玉ふ御事とて呵ゝと笑ひけりされ

ば此おかしらにづげて又不審こそ候へ只今のとくわらふといふ字を竹冠に犬と書こそ心

得申さすあらふといふ文字口篇よひろがるとか目篇よ皺などゝころ書べき物ゆて侍らめ

竹かむりに犬といふ字はいかなる子細にて書申候ぞと尋げれば一休聞じめして仰げるには是もかゆと一度お作られたり笑といふ字をたくさんとてあまた聖賢ならひ居給ふ處へ

少き犬のしらに鏡をかぶりてれどけ狂げれた人々一度よをつと笑ひ給ふ其故にこそ右の

とふりかく也とのたまひけりいかさまいはれを承はればおもしろき御事かおとかんじ

ける處と和尚みそましたりと思し召物体文字といふものは十ゝよく理をせめたるものに

でおざるぞ日用にみなゝ書ねそならぬ金といふ文字い中にもよく作りたる文字よて觀

音經の中にも金銀瑠璃硨磲琥などゝ七ッの寶をいひならべし第一番に金銀といふてある其

金銀なれども持べき人がもたねば寶とはならぬ依て人といふ字の下に土といふ字をかき

て金といふ字に讀す何とようしたるものでいないかと仰げれ之成程とそいひながら此男

も何かなどんとつきたく思ひて和尚さま御尤の仰ながら草行てかくとさはいかにも人の

主に候へども其字で書ますと金のやうにのきますれば主といふ字とは少しちがふやうよ

存ますがいのゝと申ければされば其不審はなくて叶はぬところそこが第一の窓のつけど

ころよ一日もなしてはあらぬ大切の金なれどもしんでは身につの字入らぬものよと仰ら

れければ扨も〳〵深はかなる御たづねを申上一生の寶を得たる事よと悦ひてこそ歸けれ

天狗問答の事

○一休常陸の國かしまの宮居一見のため參詣なされけりすでに御社ちかく歩み給ふにしげりたる森の木陰より何ものとも知れず丈六七尺あまりの山伏つと出來り和尚にむかふて佛法はいかにと問ひかけゝれば胸にありと答玉ふさらば割て見んとて氷の如くなる刀を抜きて心もとにさしあてけるゆ一休すこしもさわぎ給はず

春をにさくや吉野の山ざくら
　　木とわりて見よ花のありかを

と吉野を詠じ給ひければ變化のもの恐るゝけしきにて何方ともなく消うせぬいともめでたき哥ゆゑあれ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休御下向のとき所の某ゆゑ和尚の答話よきを聞たよびし故一休の頓作をまのあたりに聞んと思ひめしつかひの童にれしをいひけるゆは和尚こゝを御通りのとき生恁麼のときいゐんと申せ和尚なにとか言句あらば喝といふて立されよといひふくめ教けれども聞なれぬ言葉なれは覺がたき説に見にはるもをかさねていひきかせけるには生の字はあまといふ字なるを恁麼むいもをいんとをねたるものを疊へよとをねんごろにをしへふき一体の御通りをおろしを待たる所へ和尚何心なく通り給ふをかの童かけ出でなまのいもの時ひかんといふ一休取あへず笑てもよし燒てもよしと仰ければをしにのをく喝といふ一休こたへてゐくひかと有ければ某どのもをかしき中ゆ頓作なる事を感じられけるとゐや

蜷川秀句問答

○一休ひにい山へ登り給ふとき蜷川殿右衛門といふもの御供申されける折から彼山へかゝりし頃和尚さゝへ申上たき句ふとうかみ候間申て見候はん御付被下よとて

ひにの山路をひろひゆくあな
とんひもはてぬに

さしとけてふもとに四貫の銭とばちり

とつけ給ふかくいちはやき御頓作にてゞ有けるそれより山にのぼり給ひて種々の詩歌あり前集に出したれ
りゞこゝゆ略す

一文や二もんは何と思ふなよ阿彌陀も銭て光る世中

金持を十人よせてながむれは中に五人は無學文盲

赤飯の答話の事

○一休和尚したむき在家へ御出ありしとき折ふし到來せしとて強飯を奉りけるが亭主こび

たるものゝ兼て和尚の答話とこゝろ見んと思ふ折から是幸ひと出しけるに遠慮もなく手づからにぎりては喰ひ握りてはくひ好物のよしにてしたゝの召上られけるを扨こそよき折からとて和尚さませきはんなればむさとは胸は通るまゝきにそこつにまゐるはいかんといふ一休そらさぬ風情にてひたものまゐりけるに亭主しきりに一向なくしてまゐるゝせんなしいかに〳〵とせめければ其時和尚答へ給ひけるはこれ見られよせきはんと間からにゝぎりかため手形とつけて通すほどゝよいくらにても通る也と仰ければ亭主も理に折てあきれはて赤飯を他ぶりもらひながらこゝろ見も得せざりけるとかや

極樂の沙汰の事

○一休の御寺へ日頃御出入申ける白俗なるものたゝ一向に彌陀の淨土に生れん事を願ふこゝろふゝりしものありしかさるほどに當時の名僧ときけば八宗九宗のへだてなく足をうらさまゝなしあなたこなたへ參りつゝ極樂淨土に生せん事の沙汰のみに日をくらしけるあるとき一休和尚の御寺へ參り申けはるそれゝしは淺ましく愚擬暗昧の身と生れ候へどもたもちがたき佛性を具え申上はいかやうにも修行仕り來世いかならず極樂國へうまれ申たくとぞんじ申す哲學ふかく候去によつて四方の能化たちへ參りてはうけ給り候ゝ他の師ゝ十萬八千里のとをきあなたに極樂ありとをしゆ給ふに一休さまには地獄どくらく目前にありとしめし給ふ遠き道のほどゝ候得は百里や二百里のちがひも有まゝきにも候はねどもかやうに大相違あるにより某申よひ申候間あはれ此土の御しひに賢と示し給へとなみだをながしくどきける和尚聞しめしされは迷執ふかきもの、爲にゝ十万億土と說き悟了通徹のものには目前と說き御經にも去此不遠とあるはこゝなりとのたまへは俗かさねて申けるゝはかやうゝ丁寧ゝ御しめしと承り候へども終ゝ七寶莊嚴の極樂いかほど尋申ても見申たる事なく候はどにとても御慈悲に今一句ねんおろゝ御示しゝあつあり度こそ候へといふ一休きこしめしされはこそ極樂目前にありといふゝ七寶さうおんのかたちあるゝはわらず人の爲に口に說てしめす極樂にあらず人と自己ゝ言句をはなれて悟り得ずんばしるをなししば〳〵坐禪工夫して見付よと仰られけれゝ恭なしとて家ゝかにり襖をかふり晝夜あんじ暮し明して不斗あれたゝしくも和尚の寺へ參りため息とつきさて〳〵目前の極らくゝろ見付候へとてさても多の衆生の迷ひと知らざるこう不便のとに候へ此度ゝそ悟ゝひらけて候とて笑とふくみ小とぎりして申ける一休聞てさこそあらめこゝろの面目だにひらけなば何のうたがひか有べきそ去ながら其方の明らめやうはいかんとゝひ給へばされはこそ此極樂と申は貧賤富貴にもよらず老若男女の隔もなく朝夕きうりにある事に候といふ和尚打うなづきもつとも〳〵ゝき必得かなさて其極樂

に朝夕安坐したる心はいかんと問ひ給へばされば其事にて候美食蔬飯にかぎらず朝夕のおくを樂しみにたふる所こそ極樂にて候よとさも自慢らしくじうめん作りて申けれど一体も手をうつてわらひ給ひけるとかや

俗より弟子を頼まれ給ふ事

○一休の旦那にとろかなる者ありけるが此者折々まゐりて御物かたりと承りけるがあるとき二子出家すれば九族天に生ずるといふ法語をうけ給はりて深くしんじ只ひとりの子をもちたるが此小兒を御弟子になし下され候へとてつれ來りける易き事なりとて直さま髪をそり落し小僧となしかしらと御手にてさらり〳〵なでまわし給へば親も何ぞ有難き御引導もあるべきと耳ぞすまして聞居たるに和尚作り聲してきんになれ〳〵牛のきんになれ〳〵と三べんまでのたまひければ親案に相違し大に腹立して是は曲もない事をのたまふものかな佛までは得ならずとも菩提ぶなれとなりとも定てありがたき御引導も有べきとぞんじの外なる牛の陰囊になつて何の益か候ずやとて一休としきりに白眼ける其とき和尚うちわらひ給ひてされば末法の出家は行ひ難くして落やすきさるほどに牛のきんはぶら〳〵と落さうに見ゆれども一生落たるためしなしさるによつて斯ハいふなりと仰れば彼旦那何とか心つきけんひはれを承れば面白ありがたく候とて一子を連て歸られける

天の笠を着給ふ事

○關東より一休御上京の折から深るべき大名と覺しきものとあとになり先になりて登らせ給ふ頃しも水無月のすへつかたなれば暑氣ハなはだしかりしかども笠ともめさず歩行給ふが乃大名もこゝろやすしさ方にて使をもつて申されけるはあゝる炎天に御坊はなど笠をめさゝるや幸ひに持し合せたる古笠候ゆゑこれを着せられおとて笠一かいさし出させければ一休も禮を正しくして宣ひけるは御心ざしのほど近頃祝着申て候しかしながら此法師は天をかさに着し候へばあつくもぬるくも候はずとのたまふ使の者たちあべりおく と主人に申上げれば大名もいかさま此坊主たゞ人にてはなきぞとて必ず馬のけわげもかけぬやう日蔭をよぎて通せよとて留りの宿をも御かまひなく同宿せ給へと申つかはしける故程なく暮に及びぬれば同じ宿より泊り給ふ其夜かの大名の御方より使ともつて申送られけるは畫のほど笠を參らせんと申なる者にて候旅は物うきものにて候とに此ころの暑さゆさまそつかれさせ給いん御酒一献まゐらせんこなたへ入らせ給へと有ければ一休過分の御事なりとて使と案内にて行せ給ふさて奥の間へ通り給へゝ大名聲をかけ給ひていかに御坊よ和國のならひ人に逢ときに笠をぬぐとこそ承るになにとて笠いぬがせ給はぬぞと申されける言葉の下より脱きてもかけおくべき處なく候とのた

まひける扨ころ一休和尚よとすいし參らせんよ〳〵種々御ちさふ申されけるとかや其席さま〳〵のれもしろき問答など有つれども聞もらし也

稚き時御引導し給ふ事

○一休いまたわずか十歳に御とき師の長老田舍へ行給ひ御留主の處へ旦那うちに相はてたるものありいそぎ御引導被下度よし使申來りければ御他行よて候へは御歸りの日限もしれざるよし返答ありしにさ候へば御弟子がたにても苦しからず是非〳〵とふして頼み是死人と寺へ昇込みける折ふしれとなの弟子も居あはせざりければ一休さもしゆしやう氣に用意しさて棺に向ひて死人をゆひざし次にわが身をゆひざし又兩手とひろげて何のこと葉もなく喝とぞ乃たまひけるかゝる折から長老の俄にかゑり來給ひて物かげより此有さまを見給ひのち此引導いいあるる事そとありければ一休申けるはさん候死人をゆひざしたるは汝が死たるゆゑにと申事それがしを指さしたるは此小僧にと申事にて兩手をひろげたるは大なる恥を我にかゝせたるぞと申たる事にて候也とこたへ給ふとなりけ

泉劫堺にて遊女と問答の事

○一休和尚さかひの浦に御越ありしとき其處に旅客を宿する家居のうちに地獄といへる遊女あり此ものゝねて一休和尚の名高きをしり一首を詠し奉る

山居せは深山の奥に住めよりしてゝは浮世れさかひ近きにて

一休哀れゝ御返歌

一休が身をば身ほどに思いねば市も山家も同し住家よ

と返歌し給へどもこいつたゝならぬ者とおはしめしあれりの人にいかなる女うと難給へ

きゆれこそ音に聞ゐし地獄と申遊女なるよし申ければ和尚其はゝ

聞しより見てはそろしき地獄かな

と遊しければ遊女とりあへず

しみくる人のおちざるはなし

ともこたへけるとあや

乞食に小袖を給ふ事

○一休極月の末つかた東山より田といへる所へ御越なされけるかへるさよ今出川口の河原に丸裸なる乞食の伏し居たりけるを御らんしてさても不便の者やとおぼしめし御小袖を一重ぬぎて取ちせちゝゝに此乞食よろこぶけしさなく袖うち通しきたりける一休申けるはさてもあふしきなる乞食哉一錢だにもいたゞき伏れがひは乞食のなりひなるにはゆゑけしきもみへざる財寶しくもれもはざかとそひ給へが乞食てたへて申けるは御身はわれ

よ小袖をくれてうれしくも思はざるかとこたへければ一休手とうち扨もわやまつたり一大事のさとりこゝなりけるぞやいかさま此乞がひ人はたゞ人よはよもあらし愚僧の愚痴をはらしぬることそうれしけれとてたなおゝろを合せ目をふさぎてれがみ給ふ其うちにの乞食は消うせけん小袖をかり殘りける不思議なりける事とかや

大和岑の藥師御利生の事

○みねの藥師は靈驗あらたなる御佛にて願ひあるもあらさるも參詣の人たへさりけるあるとき瘡を病る人ありて七々日のあひだはだし參りの願ひを立て毎日〳〵をこたりなくまうでけるすでに四十余日よ及べども其しるしなゝりければ如來を恨みたてまつりてさんざに悪口しける折から一休和尚の御下りと聞しよりいろぎ御迎ひに出てしか〳〵のよし申上ければ和尚聞し召し仰けるは如來のれいげん無にはあらずたゞなんぢが身と恨むべしさりながら我はのり見んとて狂哥一首あそばし藥師へ今ぞんまうで、此うたとよむべしとのたまひければ病人よろこびいろぎ參りけるが頃しも五月中の二日あれば貴賤群參のろの中にあるひは現世安穏後生極樂といのるもあり又南無藥師留理光によらいかれを助け給へこれをすくひ給へなど、口々ふの、しれを物さわがくして心定かあらずしばらくは内院よ入て人のしづまるをまちけるがやう〳〵深更よおよべばみな人下向して殿

明の法師と病る人とばかり成けれを件のうたを出しつゝしんでよみあげけり

南無やくし諸病悪除の願なれば
身よりほとけの名こそとしけれ

とよみもはてぬに内院よりけだかき御聲にして

むらさめはたゞ一時のものぞかし
おのゝみのかさそこにぬぎおけ

と聞へけり有がたき佛勅やとしばらく禮拜してたち上り見れば身のあさはたちてゐとも
なし病る人骨ずいよ通りて尊く思ひすゝに發心して諸國修行よ出けるとかや

一休衆道くるひの事

○和尚は衆道ずきにてをし〳〵て兒のつちきへの艶書こゝかしこに有とんへりされと御心の動き玉はさる事を駿河の府中に小玉辨之助とて郡に、げなき美童ありけるに和尚ふかく口説玉へどもしたがはざりければ狂歌をおくり玉ひける

花は根に鳥はふるすにあへれども
人はわうきよかへることなし

とばかりよて小辨どのまゐる都がたのづくようと書てつゝはされければ御哥のこゝろに

や恥けんしみ〳〵と御返事申上てすなハち其夜まゐりて御のぞみよ聞ひ申さんと申上ければ和尚うなづきよくこそ来りたり今朝までさこそ思ひ〻が今はもはや用事もおしとて歸し玉ひけるとかや

傾城に御引導の事

○赤坂の宿にいつきといへる名高き遊女ありけるおしばらくの病ひゐて身まかりけりしたしきものども集りて申けるはそれ女と五障三従の罪ふかきにまして流れの身なれば大かたよてはかなふまじいざや一休和尚を願ひたてまつりて吊らはんと御旅宿へ參りかく罪ふかき女にて候御なさけゐ御引導なしくだされ候いやあうがたくこそ候ものとひたすらねがひければ一休やすき事とてそぐにかる〳〵しく其家にいたり御引導遊しける

僧は衣と貴り女は紅をうる柳はみどり花はくれなゐ

陽とのたまひけれバ棺のうちより光明かくやくと見へしが剰さへ其夜に日おろしたしくなしたる者どもの夢に成佛とげたるよ志を告けるとなり又同所に煎茶を往來の旅客にうりて世のいとなみとせし男ありしが病もなくて頓死なしたるを近きあたりの者どもより集り水などをろ〳〵き氣つけなど呑せけれども更に其甲斐なかりしかと折ふし一休御通りありけると幸ひの事とて其よし申上御引導を願ひければ

一ふく一せん一期の間末期の一句雲客の話

喝と御引導ありけるが是も往生をとげたりとふしぎにあたりの者の夢に見なけると也

大食の御咄し乃事

○或とき殊外大ふうをいふ男有けるが一休和尚の御相伴の非時を給りけるが和尚の仰けるはさても其方はめづらしき大食かなとのたまひければかの男いや是はたぶると申ほどあてはなく候某が若き友だちより合かけろくいたしたるとき餅米壹斗つかせ我等一人して食ずれども、いまた食たらざりければあたりに翠もちしたゝか有けるゆゑそれをも殘らず喰尽したるにあまりに腹ふくれたるよより河邊へ走り行大なる舟あるを見るより其舟を横にもちて川水をせきとめ申たりと首ふりてかたりければ一休聞しめしさてもおびたゞしき大食かなろれほどの大食はめづらしく去ながら愚僧おゞんじたる山伏ありしがこれも大食人よてかけ錄して餅米貳斗をつあせてそれを一人して殘らずくらひ余りに腹ふくれけるにや廣き松原へはしり出て三か〻へばかりの松の木を捻折てこしをかけ休みける所へ少さき蛇の大なる蛙をのみくるしげに見にしが出きたりかたはらの見なれざる草を喰けるにちみ〳〵と腹へりたり山伏これと見てさてよき事と見付たる物かなとくだんの草を取て喰けるが連のつきたるにや此くさ人の消る草にて山伏い忽きへて貳斗の餅とゝ

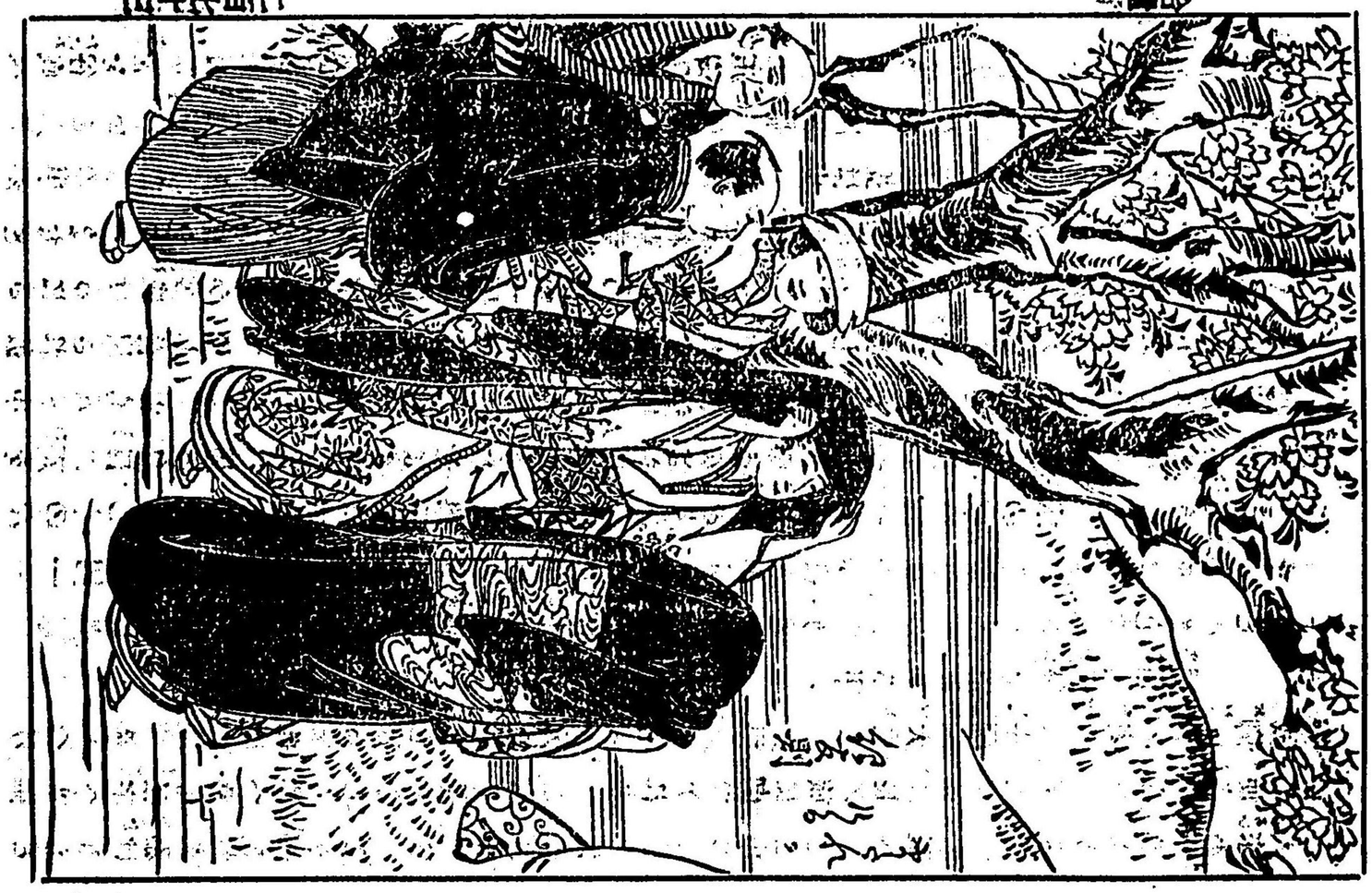
きんすゝのけぼら貝金剛杖など餘にもたれたるとがたり玉へば彼男顔色をかへて恥入早く歸りて其のち二たびまねらざりけるとかや惣じて狂がる空言いむざるもの也かの男の大ぶうをいましめ玉ふ處也

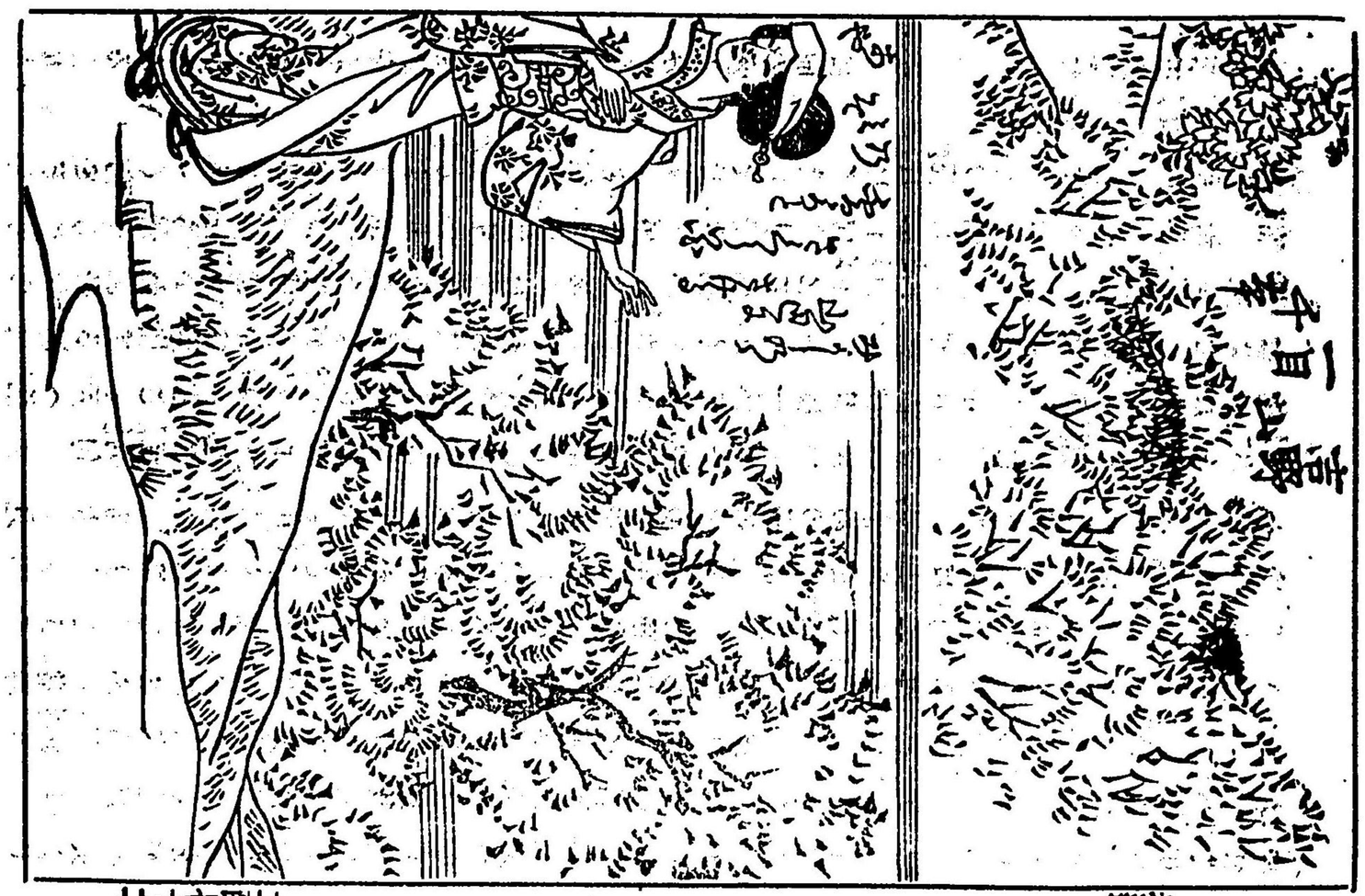
化物御退治の事

○北國方へ御雲水ありしときかゝる古き宮ゝ大なる石燈籠のありけるがいつくともなく毎ばん燈明をともしけるが其燈籠のかたばらを大の法師毎夜ぐるり〳〵と廻りけるを人皆これを見て恐れずといふものなくされども又誰あつて見とゞけんといふものなかりけり一体これを聞しめし掘僧今よひこれを退治すべしとのたまふに所のものども大によろこび日の暮るゝを待かねくだんの所へ行て見るに其夜もたがはず燈籠をめぐるをかゞ車をまはすがごとく皆人申けるはさても一体房がたいじ有べき由のたまひしかども中〳〵そのしるしもなき事ゝり〳〵詫判なす所へ又法師一人あらわれて其夜は二人むせめぐるはどに皆人いよ〳〵恐れをなして歸りしの翌日おくるを待て一休の宿所へまゐり御房の御口とは相違して昨夜ゞ化もの又一人ふへて中々鎖るけしき見に申さずといふに一休聞玉ひ其一人は掘僧よて夜もすがら追かけ廻りつゐに化もの乃は踏倒しけるはどにもはや今夜より化出まじきと化もの誓言をたてけるにより所ゆるし遣したり心易かれ今夜より出る事あらじと示玉ふはたしてそれよりは何の怪しみもなくありけるとかやふしぎも世にあるとなり

豆の秀句の事

○一休和尚いとつての輕口にてましませばある地頭の奥方より御申越しあつて何とぞ御咄し承り度よ之和尚聞しめし何より安き御事とて早速まゐり玉へは上臈たち居ならひて御ぜんとしなし有がたく候得ども余りみじかくて本意なしねがはくゝながゝと退屈する迄御物がたりあれかしと申されければ一休ともかうも望にまかすべき幸ひはなしてそ候へ掘僧さる方へ夜咄しに參りけるにいり豆を菓子に出しけるがかたゝらよりそ乃豆秀句となしたべんといふ皆尤もとてまめの子のまめなやうなと口々ふ申す中よ賢てくもなく見ゆる人出て申さるゝには奥さまのよしの參りとてしたゝあつかみて喰ふものあり人々聞てこれはいかに豆の秀句にかくさまのよし野參りとて心得ずいかに〳〵とせもれとさて御ぐんしなきよや非の内の鮭大海を知らぬためしありいつれも御どんしのとふり當春それおし頼たる人の奥さまよし野へ參り玉ふに御供してまゐりしに道すがら名所舊跡うちながめさほの川逡井出の里玉水などやうの名所つぶさに見物とてほどなく吉野よも成ぬれを山はさながら雪かと見まがふばかりなり神社ぶつかく殘らずめぐりをがみ夫より





高き所にのぼりて四方をうちながめ玉ふ所にはかに風ふき來て奥さまのぬり笠と谷底へ吹をとしける其ときそれがし深き淵よりのぞむがとく　き氷をふむ心地して風をいとふてついよ取て歸りぬされども笠は少しはげたるをおくさま御らんじてさてもうたての事がおとのたまひしろれより立田法隆寺奈良初瀬寺などいふ名所二ッ山だるまじたるまなどやうの舊跡御見物わつて御上京ありしところへ御一門の御女中の見まひ被成けるにさもじんじやうなるぬり笠をめしていつれも御越しおりけりそれおつけて思し召出され彼はげたるをぬらせよと御ありけるはどに塗師屋へあつらゆれば銀三錢目よてぬらんと申す奥さま聞し召てそれは六かしき事のなさらば手ぬりにせよとてうるし屋へ鳥目二疋をもちてうるしと求めけるにむくろヒ程ありけるを物じて奥さまは物事をひたすらしくのたまふも是は少きとかあ豆つぶほどありとのたまひけるさ　あそ豆の秀句には國一のことかとじまんらしく申されたりとかたり玉へば上藤兼退屈して色わるく成にけり

國司へ下帶を遣はさる事

○或御大名の家中に片岡彌大夫といふ浪人か宅よ一休まし申しけると此所の地頭きゝつけて使者をもつて申上げるは長の旅に御つかれなさるべく見ぐるしく候へども私宅へも御入來わりて御うさを晴し玉へかしと申つのはしければ和尚よくころ御まねき添けなして使者とく　もに地頭の宅へ參り玉へば地頭も本意よや思ひけんさま〳〵御ちさう申上てさそ何うぞ御手跡をくだされ度と乞けれど一休やそさ事なり旅宿へ歸りてしたゝめ進ずべしと約束し程なく彌太夫が方へ歸り玉ふに引つゞいて使者もきたり先ほど御契約申たる御手跡此ものへ下さるべくといひきたれば和尚もあまりせはしうや思しけれ彌太夫の書ましたる文のありしと使者にわたし玉ふ使者よろこび持かへりて主人に渡しけるを則ちきみれば見知やる彌太夫か手跡なり是はふしぎ成とがな使の誤りにてこうあるらめと使の者を尋ねれども直ち御手より玉はりしといふにさては餘りにいろさて申たる故御取ちがひありしものにやと又も使をもつて最前下されしは彌太夫か手跡と見わ申候間ぶ申くは御自身にか、せ玉ふをころのゞみには候へと申つかはしければ和尚うなつきて左ほどに深く御望ならばはかでをしみ申べきとした、かに包たる袋をころわたされける使者もち歸りて主人にわたせばやがて袋をひらき見ればさもよごれたる古き下帶にてゞありけるが地頭ぞめも手をうちて笑ひける其のち又も御入の折ふし柳とばかりの大文字にて一字かきて送り玉ひぬ又ふるき屏風に何ともかたちの知れぬ繪ありけり亭主にとひ玉へばあまり古くなり候て見分申さず　私　親ぞもが申つるには馬とか牛とかやらんにて御座候よし申されば和尚牛ならば角あるべし角なければ馬なるべきそとのたまふ亭主申されて

けるにい御筆の次手に此絵にも詠をあろゞし下されよと申されければ易きことのたまひて大文字にて馬じやげなどゞ遊しける其絵今にありていとゝめで度御覧にれさまりて貴物の其一ツとゞ成たるとゞ

長咄に退屈せしもの丶事

○さて和尚さま先夜の御はなしはれもしろくひへどもあまり長き御はなしゆゑたいくつ仕い何とゞ今夕はみじかきありがたきをわれ〳〵どもにてもわかり安き御咄しを御きゐせ下されたしと一座のものゞも御願申上ければ一休いかにもよきいなしあり皆おき丶やれや日本もおろあゝら天竺までもこの上もないありがたきものは飯と汁じやげな何と皆わかつたか〳〵〳〵と仰られた

大俗問答の事

○ある時出入の下男こゝろよ思ひけるには此寺の一休さまをば今での知識者とて皆々たつねて見へるが問答とやらんを聞に何でもない事いふて御じざして歸らるゝ我等も和尚ともんどうして見んとふと思ひ付て和尚さまに御たづね申ます男と申ものは生れ出るよ珍貴と申ものをもつて出ますがろれと成人して落す人い是いかんと申ければいまだ言葉もひかぬに金玉といへどもくろきがとし

兩眼のあきらかなるを持ながら女よあへば目なしとゞなる

女房は弁才天どうつくしい美人といふも皮のとなり

子は寶なりとの事

○一休の御寺へ常々御心易く參りたる百姓の元より家貧しきうへに子多くもちて其日も過しがたき程のものとて有けるが和尚のもとへ參りさて〳〵私ともはいか成因果よて餓鬼御ぞんじの如丶子どもを追々出來まして當年二才よ成を下として都合十二人まで出來ま し其中にはとし子もおざります私夫婦のものは日に三度の飯さへ腹よ足はゞ下された事とてもなく是がまとの子の地獄へれちたと申ものかとゞんじ开れば夫ならばゞの子が憎と申ものもおざりませぬ又かやうの貧家へ生れくる子供も不仕合のとれもへばいよ〳〵不便よもぞんじます是も前生のむくひにて餓鬼御聞ゼ下されよと言ければ和尚うちうなゴき尤ゞさりながら下の子はいまた二ッとれいやればまだ〳〵いくたり生まうやらしれぬかならず夫婦のもの丶氣をつきぬやふよして有ときわいひとつ處へより寂酒でものんで氣とはらし仕込では出かし〳〵するがよいと仰ければびつくりして和尚さま此上出來ましたら夫婦の者は何と成ませうと申ければされは夫に付てはなしがある昔奈良の都の頃白木の長者とて日本にたれ〳〵らぬものもなき大百姓があつたげなが其となりに丁

度そなたの樣な貧家ゑ種腹ひとつゑて十八人の子をもつて今其方の申さる、通り親ふたりは正月元日より大晦日まで食の足としらず隣の大百姓の事とうらやみ居けるがある時夏炎天ゑ大勢をあつめ麥をふみかこねのうちは元より門外までにも干ひろげたるゑ貴者は其麥を見るに付ても此干たる麥むしろ十八まい丈あるならば子供に一枚づゝ當わかちなば我等夫婦が此苦しみも有まじきと思ふ事をもしらず子共等はあしゑまかせてあそび歩行て目のとゞく所ゑは一人も居ぬとよと思ふ折からにわゑゑ空かき曇り大雷なりはためき大夕だちふりきたり大道忽大河のとくなりて件の干たる麥なか〳〵取入べき間もなく殘らずながしたるが隣の夫婦は門口へ出ていかゞせんと思ふ所へかちらこちらより走り歸りけるゆゑ頭のこゝを眞見れた一人も不足なく剩格別身どもゆらさゞりける徳て昔より子どもは寶じやとゝゑふ程に出かしやれ〳〵其長者といへるは大和國十市郡天の香具山の東北にすこし高き岡山を長者やしきといひまた其わきに白木塚とも諸塚ともいへる塚わりこれは其時の長者主人ゑ元より家内出入ものゑで一飲とゑ其はしを捨てふねゝひ用ひざれば其捨たる箸しせんと山となりしとて箸つかといひて今ゑあり又佛說の中にも鬼子母神といへるは三千人の子を持玉ふ其うち一人を隱され夜叉と成玉ふといへる事もありとて哥よみて玉へりけり

親となる子と成くるゑも今ならず一世も二世も尽ぬ親をかゞ事なき子ゑと貴人もあり

聞く親でゝなぶで鬼の再來親は過去わが身は現世子は未來養生大事を子をば育てよ

八ッ橋にて狂歌の事

○參河の國八ッ橋は名にしれふ名所ゑてろのかみ業平もあさつはたの五文字と句の上ゑれきて歌ゑよまれけるとかや一休ゑもいかなる名所にや御覽なされたくや思召けんとおろの里人にあんおいさせて御らんずるゑ八橋はあれてかきつばたもあくところせまきまで田をゑゑてけれをいづれをやつゝとも見すわかぬていなりければ

おとゑきく三河にかけし八はしも

田ばかりありてあさつ葉はなし

とあそばされけるとかや

驛筆の曲遊の事

○一休和尚御手ゑへ拂歳のじぶんにて有けん一條もどりゝしの辻に高札を立られける一此度日本老和尚一休三明六通を得て驛筆をひつくり返す望の方々見ゑつ可有者也　今月今日よりはじめ神樂

と遊ばされて紫野ゑ芝居をかまへ玉ひける事をて言はやじけれを京わらんべ者若男女貴

腰黄瓢をわあゑ足と空よなして非業となし芝居もすみぬればさらば時分はよきとて一休御用意あり御衣のまへに大ひなる瓢箪をぶらり〳〵と付たまひ両手にばちを持て西より東ひんがしより北北より南と飛めぐりはねかへりなんと幾たびもなしたまひ大音をあげたんひやう〳〵とて二十けんとかりまはりはねまはりなどし玉ひて其後楽屋へはしりいり御自身に大鼓をうち玉ひ是が〻はり〳〵とて殘らず追出したまふ見物のものども皆はいか成事ぞとて狂ゐるもわりあるひは今にはじめぬ和尚のおどけ哉としばらくは口も得ふさがぬものも多かりけりとかや

浪人御引立ありし事

○しばらく甲斐の國に御とうりうのうちに十人の浪人御出入申けるが一休さまは生佛ふてましますよし國中みな〳〵申事に候へは何卒我がみの不自由あるをたゆみ奉て身上にあり付候やう偏にたすけ玉へとてひたすら願ひければ和尚もふびんに思し召され一門まで もあきやとはせ玉へば某が一門歴々まあかあれども尾羽うちからしぬれば恥あはしく て参り得ず且は路銭のよすがもなく不自由にて迷惑申す身にて候われ和尚さまの御かげにて身体に有つき申度よしひたすら願上げれば和尚うちうなずきたまひけるは其方芸能はなにを得たるや浪人こたへて萬事不調法に候ども申上るんやとくれきこえの果とわれば禮樂射御書數のうち一々功ぶ明立又ども玉ひなども一つとして存せぬよし申上げれば扨は浪人もたるも道理とにおんなしくしもちく思案し玉ひけるに彼浪人申には外にぞんじたる事なく候へども故あつて敦盛の舞を習ぶて候いふよ一休きこしめして夫駄日本一の事よとのたまひ玉みゝ〳〵と内談遊しを不便よりするものをかたらひ其外鼓打などをよびあつめ天晴云合せあり芝居はまくを打に〻かしこに高札をたて玉ひける

一此度上方より幸若罷下勧進能仕勧進元は日本老和尚一休

と遊されしかば侍はいふに及ばず町人百姓五里七里をいとはず貴賤郡集してさも廣き芝居よ小屋も破るゝばかりに見物する所へ裏の浪人もやうぞくつけ氣だかく身つくろひして舞臺へ出てあつまりを一番舞すまして楽屋へ入とひとしく一人の男出てまことに小和尚さまを御入御見物のだん有のおさなどやんぎんにて禮をのべさて此つぎには何をかまはせ申さん御このみ次第と申されば多勢のけんぶつ口をあ太鼓くはんよいや高だちよ清しげよなど〻思ひ〳〵に言はやしけるところへ兼ていひ合せありけん五七人のあぶれ者どもこゝかしこよりどと出ていや外の舞は見たくなしあつもり〻舞せよといふいれたる男同じ舞は御たいくつに候はんといへばあぶれもの共いや我々がすきじや敦盛を舞さすんば芝居を踏くだかんいやつのみひしがれなどゝいふほどは又敦盛をまはしけるゝが

舞そて、又前の男出て口上とふれけれバ又溢れもの出ていやあつもりとんふまゝにつけて四五番まはせける其後はまづ今日は御いとまおひとて追出し木戸口よて明日は取かへ御らんに入る、評判とふれければ前の日よりも人は多く入ぬ御定めあつもり一ぱん舞はし次いといへば又前日のとくかねて仕ぐみたる事なれば幾へんにてもあつもりよとも七日までこう仕たりける彼浪人たよりを得て一歳の身上となりけるとかや所の地頭の耳にも入ぬれ共一休の事なればとて御しかりもなかりけると也

文錢の御咄しの事

○ある人問ていわく和尚さま通寶の中ま裏に文の字を書たる錢の候はいか成子細にて候哉とたづねければはの事よむかしは亂國多くして親をうしなひ子をたづね我が身の住家も定かならずして寐食もわすれ中々數の衣をかさね着といふはならざりしと聞しに中むあしのころよりありがたき聖君の御代となり御治世ながく百姓町人はいふに及ばず下賤の民までが日ま増しにおりに長じ亂國とやらは軍書でよむばかり子どもの耳には聞のみにて衣食住の三ツをはしいまゝま美と尽し善尽す世代がありしまゝしが其時御上様の御目にあまり万民のうれひ遠からざる基となるべしと御意をくるしめ玉ひし折から錢を鑄まし廣く日本中へ出し玉ふ印ま文の字と書せ玉ふるれいいかにといふに錢の穴も

口也口の上ま文とんふ字ま苦といふ字なりとの結構の實を〻しめよを御しめむ

勇りとい〻ふ事をわれもさぞ仰ぎ慕ふ

濁り酒の問答

○一休和尚山居しておはしますとき法たしく御出入申す仁書さの御見舞申せし折からにおり酒をまゐりゐ玉ふところへ參り合てよめる

山居して泡すまゝと聞ゐるに濁り酒をばいかで飲らん

其とき和尚とりわへず

山居してのむ〻きものを濁りさけとても浮世にすむ身でもなし

と遊ばしけるとかや

山伏と問答の事

○一体關東へにも彩おせ玉ふきき侯大ま〻御つれある事をいとひ玉ひて普化僧のすがたとなり尺八と吹て通らせ給ふを道にて和尚を見しりたる山伏にあひ給ひしに山伏しらぬ体にてとひをのけ〻るにはいかふ普化僧との御方へ行給ふといふ和尚こたにて仰けるには風にまかせてと仰ければ山伏いひけるは風ま書はいかん和尚こたにて仰ける〻には吹て行と聞ゐ付ればは山伏〻がを〻られ悪日をも修ま書を見ずして過けるとかや

壁に寄する戀といふ題にて詩歌を給ふ事

○一休和尚のある日なる御事をはくしりたる人御住意を聞んと御庵へ参り壁に寄る戀といふ題にて歌一首遊ばされと所望あしけれと取あへず

君をつちみねばやひとあはねるは
戀にしたなのなたたちをけり

とあるはしける双曲の戀といふ題にて詩を一首とこひければ

舟さへ艇に畑　惹レ恨長　六宮寞寞月昏黄
羊車不レ至　共嘶殿　知レ有二佳人一漫炷レ香

不動の古佛の事

○或人不動明王の古佛を秘蔵して安置居なる御尚岸に掛給ひはる
き彼不動を御覧じて、やがて一詩を賦し給ひはる

全身　黒　黒　稱二明王一　生中岸口　印印　振手
一生不犯　無二念者一　去何處　固護　広堂

かく七言絶句と作り給ひ汝いかなる不動を信仰するならば其の尊像を給がきてあたふべしとて筆とる給ひてさらさらと大筆を揮て水中の岩上に三尊畫給がき給ひて大字にて不動尊とおそばしかく書のとおりに必ず生みあ文字をしきと示し給へり

独川　生前死後を示し給ふ事

○ある人一休和尚に生死のさとりをいかゝ心得べきやと問ふ和尚のいとく忠孝仁義に過たるは無しと仰せられ有がたく心得申候死ての後はいかん火葬のゝちは茅蓬業ならん汝何とて死後をはうるゞや自得せよ生あるものは必死あり平生臨終のときと思はゝ臨終のとき平生なる事は解脱死苦いたるとも驚くに足らずして生死に念をかけずんば微塵も屬する事なしとて絶句を賜てあたへ玉ふ

不二辞二因果一受二塵縛一　正指水中獨立岩　明月鏡本空月下客　花晨興到樂二皇天一

また問ふ如何が是佛休答て曰

河伯来りて水と求む

河伯は水の神なり世界の水は我手の掌のうちなるし置て却て外よ水を求むるがとく汝が本分の佛性を顧て自知せよ

探尋水源迷路
佛よりこゝろもなきす身もならず
一路一路ならぬものこそならぬありけり

一絶を賦して云

無始無終我いつ心さとり　不成佛性本來心
本來成佛佛妄語　衆生本來迷道心

むしやかとゆんやたゝらあみが世に出て
多くの人を迷はするかな

此歌の意味前篇にはしく爰に畧す

蜷川新右衛門藏問答　言

○あるとき蜷川ゆれしいなる折から和尚さまの許へまゐり居合されたる事を御物申すとて

このうたのゝゝろはしらじ恐らく
釋迦も達磨も定家家樓も

一休遺歌に

釋迦達磨定家家樓もしらぬ歌
くさの役にもたゝぬなりけり

蜷川

おもかげのこのはもきはいかばかり
今はかてなにを信をまもるよすがに

一休

あもあげはかいらをかばれ年もよれ
無病りく才死なをおつとり

同

世の中にあきのぜたぢぬ花すゝき
さねかばもかん野へも山へも

○御一代のうちに狂詩の多かりしを前集に出しぬれど今またもれたるを出す余は狂雲集を見玉へかし

於一谷

蒋永三年三月天　九郎冠者乗兵船
源平谷戰無申斗　海底死人幾萬千

題茶釜

有口不言全体闘　不離色相絶諸縁
井呑大海江河水　吐出超劫一味禪

題貴鶏

鳥亦説經似度他　樹頭樹底妙音多
林間花若諸菩薩　中有黄鶏小釋迦

又題一谷

打落平家無數兵
敦盛熊谷進退速
落髮之時
東山下玉毛頭
移得天合具羅漢

題男根

我此食裸八寸强
一生不觸美人手

題那須與市

與一源平第一弓
塞目新念鉄馬上
題宇治川先陣

頼朝大將秘藏馬
生食前非磨墨後

九郎冠者大高名
一朝懸向上時聲

今日出家作比丘
平生所留一時休
夜來抱汝臥空床
猿鼻揮中日月長

判官召道射成功
七花八裂扇眞中

宇治川先陣給之
梶原源太一騎遇

題那須與市

那是何物
雖爲人喰十分肥

有錢有酒有金銀
游寺山若僧連

日夜忌君長不忌
夢中携手欲相語

花嘆花曲易老花
花時花來可惜重

同

生天成佛閑思君
有力欲至不應拂

元來見來更無骨
瘦骨一捫沒生涯

今歲初成大德人
未申案內往來頻

夜深懸幕臥空床
被駭曉鐘又斷腸

花顏花盛夢中花
花落花過誰問花

灯下吟詩瘦十分
胸闊鎖斷楚山雲

題二性靈棚一

飯在二中央一盛二曲盆一　餓頭無味鉄湯器
懇懃三酒性靈水　水出推流地獄門

布袋依レ袋眠　人言是座禪　工夫無二一字一

大食腹便々　漁父漁歌一曲價千金　無レ恨風流夜々吟

同

熙海兒孫誰正邪　不辨尽偏知正邪
狂雲身上自尿臭　扶桑國裏沒禪師　東海兒孫更有レ誰
今日窮途無限淚　他時吾通竟何之　飽飯封書小飽詩

學道參禪失二本心一　漁歌一曲千金無レ恨風流夜々吟
湘江暮雨楚雲月　辞世

或儒者或歌客僧　不レ管二人犬大衆憎一
飛來蝙蝠暮堂裡　怪一長二無明一滅二法燈一

悟の歌

○はちす葉のにおりにそまぬ露の身はたゞ其まゝの眞如實相
○佛とてはかよもとむるこゝろこそまよひの中のまよひなりける
○ちればさき咲は又ちる春をの花のすがたは如來常住
○ぬらしつる袖のなみだのかはくまもなき面かげの月そ立そふ
○れのづからの身にいたづらに成よけりこくうど常のすみ家と思へば
○かりの世にはだなる露の身をもちて千とせをいのゝ人のはかなさ
○世のうさにかへてすみぬる柴の戸に問はじかほなる人もうらめし
○妙なりし法のはちすの花の身は幾世ふるとも色はのはらじ
○其まゝにうまれながらの心こそねがはずとてもはとけなるべし
○露ときへまぼろしと覺に稻づまのかげの如くに身は思ふべし
○なげくなよ厭の道はそのまゝふたつともなく又三ツともなし

○らく〳〵と心にてこそ彼岸にわたるもやとき法のふな人

○生死のことはりしらぬ坊さまは犬の衣をきたるなるべし

○奥山おひすたずとても柴の庵こゝろからにて世いとふべし

○國いづく里むいかにと人とゝ、本來無爲の物とこたへよ

○燒すて、灰よりなたゞ何ものか殘りて苦をは受んとゞ思ふ

○妄執の雲をはらさで終る身のなり果を見よ地おく成らん

○けふりたつ野邊のあとれをいつまでかよ所よ見なして身は殘るらん

○ひゞ〳〵に行末とはく成にけりいつをかぎりのいのちなるらん

○闇もりにわが心をやかしぬらんすぐなる道と行かぬる身は

○すみのぼる心の月の蔭はれてくまなきものは本の境界

○はかなくもあすの命をたのむ哉きのふは過し心なりやや

○さとり得て心のやみの晴ぬればじひもなさけも有あけの月

○三日月のみつればかけて跡もなしとにかくにまたあり明月

○はるゝに咲るさくらを見るとよなほはかなしと身こそのらけれ

○待得てもほどはなかりし鄭谷もをさろひでいづち行らん

○年々にしぐれのそひるもみち葉と四方のうつらふためしともしれ

○月は家こゝろは主じと見る時はなほかりの世のすまね迯けり

○こゝろをば墨の衣に染おきて身をはうき世の道にまかせて

○寺を建堂をたてたるくどくよりたゞ常々のヒひやましなん

○しばしげにいきの一筋がよふほど野邊のかばねもよ所に見にけり

○色相は其ときく〳〵よかばるとも不生不滅のこゝろのはらし

○見ることに皆そのまゝのすがた哉柳はどり花はくれなゐ

○前篇に一休和尚御母君へ水かゞみ目なし卿なんとゝふかな書法語を書て進せられしのちまた昔よりの祖師知識方の教化ありし言の葉をひきてかな文となし念願に示し給ひし文

往昔今よ至るまでうき身の有さまを夢の如くにさへ思めされ候へば何事も御心のとまる事御ざらましく候爰を佛御くゝんねん有て法華經の文に觀彼久遠猶如今日と御のべ候此文の意はかの久しきとをき事を見給ふに同じく今日のをくに見給へとの御事よて候天地ひらけはじまりしより已來あはるとおしと万の事をさとりたまふとの御事よて候しかればさのみ深く御不審あるましく候佛法と申い生死苦といまじめ玉ふのみさちに心をとゞ

めても其かひなき誠と見まひらせ候を先禪家にもちひ申候かやう申候事證據なく候へた
細何とおぼし召候やと存じかゝの事を大かた引申入候都に夢想國師とて日本にかくれな
き御僧のまし〳〵ける其頃は尊氏將軍の御代なりあの夢想こくしさとりの御歌に

夢の世にゆめのとくに生れ來て
つゆときへなん身こそやすけれ

夫人間のありさま万事といまるとなしもとより生のはじめとしらざれば死のをはりをわ
きまへずやみ〳〵ぼう〳〵として苦みの海にしづむなり佛こゝを哀とおぼしめして色々
の御方べんゑて衆生をすくひ玉ふされども人間のこゝろ不同ゑまて惡道へあゆみをす〻
み善方へは心すゝみかたくいたづらゑ光陰をおくりあはれみの業果たへずたま〳〵敎に
たがふといへども名利の善をなすとゝかりなり名利と申も其身の名をあげ人にとめられ
んと思ふ心とたねとして堂塔と建立ゑとゝきの富貴にはおれり斯のとくの人を佛はふかく
きらはせ給ふまことの道も万事法度をろむかす世にしたがひてかたく法を守る人と佛道
に成就の人と申あり御年もをやくれ近く成らせ給へば何の御望御ざ候をんや殊さらぢお
くの話をもしろしめされ談うへは行く水のおとくに御心をもたせ給ひて御胸のうちに何
事御ざなく候へば世尊御一体の御身と御座あるべく候ゑゝをはとけ三部經に己心の彌
陀唯心の淨土とのべ玉ふ此文字の心はれのれがこゝろの陀彌たゞこゝろ淨土と申也しか
れと十萬億土は御ねがひあるまじく候

佛とはなゑをいはまの苦むしろ
たゞ慈悲心にしくものゝなし

此うたのおとくに御じゆう候へば何事も佛心と見まゐらせ申べく候古しへ舟田の御は
うじおうにて宗建をもじめまゐらせ人々ゞさせ給ひ候事夢とはれぼしめされず候や申
までもつくしがたきはかやうゑけなげに御入候てわたくしもながらへ佛法の御事ゞも申
上まゐらせ候御事は他生の緣ふかくとぞんじ候因果經ゑ自以唯ならんと佛も御のべ候ま
た母にて候ものは七十六にて去年相はてられ候心昌と申せし辭世乃歌

世々おとゑ見につかくれつすむ月の
かはらぬ色とたれかしらまし

此歌とくちずさみて其のちはそれさまへ參りて御菩提の心をすゝめ申候へとくりあへし
申され候つるあの御めいをそむきがたくぞんじ候てたび〳〵參り候つる母にて候ものゝ
事おもひ出し參らせ候へは一しほうあたへ參りたく社候へはやそれさまの御覺悟も大わ
んらくの道に御心つき候へかめで度滿足いたし候御なぐさみなゞは御ゑんきんなしか

るべく候御心つくしては夢〻御沙汰候まし〻く候大般若の文に一切不行と佛の行とすと御座候哭をもつて昔さる知識のうたに

あら樂や虛空を家と住なして
こゝろにかゝるそらさへもなし

出るとも入とも月とれもはねば
心にかゝる山の端もなし

これも生死にとりあはぬところの歌にて候よく〳〵御くふうあるべく候又弘法大師の御辭世に

今はゝや後世のつとめもせさりけり
あらんの二字のあるふまこのせて

いつれもさとりの人はかやうに日まわき候やう申おかれ候また慈鎮和尚のうたよ

かりの世よまた旅ねしてくさまくら
ゆめの世ふまたゆめを見るかな

引よせてむすべば草の庵にて
とくればもとの野はらなりけり

是は色相のうへとあろく思しめし候へとの心にて候いつの日いつのとき御大事來り參らせ候とも御心のうちに何事も思召候まし〻く候病難りしいたくせめ來候ともそのくるしみよまかせて相果候へと大唐の黃檗禪師の傳心の法要と申にも書おかれ日本にては聖德太子病なんのとき御歌遊ばされ候

うき雲はいくへもかゝれ空よ消
月はくまなきひかり成けり

此歌のこゝろも何事もとりあひ候はで無念無想の所ともちひ候へとの御事にて候又ゆらの開山のうたに

何事も夢まぼろしとさとり來て
うつゝなき世のすまひなりけり

此青のこゝろはいかなる大王きさき其外上下の人〻かなしみ給ふは死の道にて候こゝをさへ御かくお候へばすなはち安ようの淨土九品のれんげふまとはれて大安樂の御身さなちせ玉ふべし大世尊の御說法にも女人成佛のかたき事をかくとき給ふかやうの事を聞としめして御遺心すてさせ給ふまし〻く候其ことゝもりを荒々申わけ候男子に生をうけ申候てのこらず成佛そべさにあらずとに龍女八才にして三國に名と殘し申候御經にもほめ給

ふ然は女人こそなほもたのもしき御事にて候へと成佛とてべつにたつときひかりもぬ体ち奇特をも見せ申事はあるまじく候御さとりの御心中にこれぞ御不審候いぬと思召候事御座なく候を大のさとりと申事よて候佛御入滅のゝち祖師先德のさたし給ふ御法よも見聖受用乃ふたつにて御入候三ぞくとも御太儀に思しめしましく候五戒百かい五百かいをたてられ候事もたゞ一身のさたにて御入候御女房衆の御さとり有しは　嵯峨天皇の御さ
さき檀林皇后なり其外人乃歎をしらず美濃のくに、は興性寺の千代能と申女さとりて候

其歌に

とよかくよたくみし桶の底ぬけて
水たまらねば月もやどらず

かやうの事を聞しめして今日より禪宗のさんがくに御心をつくし給ふべし愚僧御手と引申すべしまゴ〳〵くさ〳〵の御心をたゝせ給ひ後世と御たすかり候はんと御かくお候へそすゝめ申ものは何者ぞや又かやうよ不審とうけ申もれは何ものぞやと目に見ゆすしてさまゝゝなりゆくもるに六道りんゑのたねと成とを佛これを三ぞくと說給ふ一よけんぞん二にいあり腹立ると三にぐちの心この三つをたち候へといにしへ今にいたるまでしめすなりどれとしらされば愛とうの心ふかき故よ人をねたみそしりあればうらみこんもて

ねがひよ苦しみのなみだを流し袖をしぼるなり是こな一心のわざなり久しく遠き事を觀と物をわすれざるも一心なり四百四病をうけ大苦をうくるも一心也雪霜のさひき事をいとひ大温を苦となそも心なりされば此心一ッを取とめがたければ六道のおうたへす生に生とかさね死に死をつぎうき沈むのみなり此心といふものはいかにとはんじ申よ影かたちなきものなりかたちなき故よ消うせず去かれを生もなく死もあしこゝと佛とも金剛の正体とものべ給ふあり無相に去て有たるが故に古來より行とゞまる事なし住所さらになし色相の生滅よあづあるによつて無常と說き又い大死とのべて是を愍みかなしみて定離と申也かやうよ申入候は御心よかたちなき所を御らん世られ候へと申事にて候何ものか色相をさつて佛神とも鬼神とも成申べく候あり浮土と穢土の事こゝを以て御分別あるべく候御不審のはれ申候はゞまよひの雲千里萬里の外にはらひ一つとして御心とゞまる事あるまじく候て、を大正覺と申なりあゝふいたりて心經にも色即是空空即是色とゝき給ふ一心の外にべちのものなし本より經にもなゝ心は無始無終にして住所なし爰と開て天地草木の畢竟して見る法はあさく候見ざる法はふかしはやゝ生死のきづなをいなれ大解脫の御身とならせ給ふべし
御工夫よも古則話頭御不審はなれ候よし仰られ候尤に候むかしの御僧たちの集め給ふな

そらへとあらく〳〵かなにて御なぐさみよしるし參らせ候

本來の面目のしめしやう不思善不思惡未生已前いづれの所より來る又はいかなるが是本來のめんぼくと斗もとひ申候此言葉をうけとりて三十日五十日乃至一年二年くふうとげて案じ申やうは我が身の生の所は佛もいづれの祖師もしられまし〻く候佛祖ふしぎの所是にて候と申候へゞ此上よじゆうとていろ〳〵大事あるよし長老申され候間また是を工夫して申やうは天地開闢よりこのかた知られまじきとじゆうと愛にて長老尤のよし申され候學者の智にをしにによつて其語をするなり大かた此分に候

いくじゆしの話頭とていあなるか是そしさいらい意といふこゝにて祖師のいとく庭前の栢樹子とこたふ心をさんせよと申よしかふして學者の曰祖師の再來庭前のはくじゆしも同七心にて候たゞ天然の理にて候前後しらぬ心にて候とてぢやく語に松い直く荊はまがれりと申又色相分離してのちいかにとゝふ松直ならず荊曲らずと申三度四度申かへしてこれを至極の道理と申す是は柳いみどり花はくれなひのこゝろなり此極意を口といふ根本無相なる處を去らんがためなり大かた此分よ候

萬ぼうふりうといふ古則よろづに友たらざる人これ何人ぞやと問ふがくしや耳どろをたてゝ是を聞き年月へて申やうは我が一心を萬法の外にて候躰も色もなく候物にくみせぬものに候しかも天におゝひ地に滿りしかれば左右もなく閻下まん〳〵として有ける故よ法界一心とくはんじて大國のそう居士名を殘すこれは目に見ぬ物の有所を見出してかくのごとく申也地獄此ときやふれ申候心御入候也

本有圓成の事はんらいの佛何の緣をもつてめいとふの衆生となりたるぞや學者くふうして申やうは根本は無念無相の佛なるを衆生の色緣ゐひゐれてのやうよ寒うん苦樂を得る身となり來て候愛に念をとゞめ此界にりんゑなくい本身の佛性になるとて此ときを種々無量となしさ〻〳〵言葉をつくし善根しやうと見るなり

たりの話の事釋迦みろくはかれが奴のれはたそこのさとりとうけて年月へて老僧の前へ出て座上よ和尚無く眼せんゐ我なしと申て一眛平等のところ何か差別あらんや然られ奴もなし我もなし上下元來佛も衆生も一躰ならずや大かた此分の心にて候

いかなるかこれ地獄としめされて年月を經て工夫して申すやうは眼前これ地獄と申又とふ何事に地獄ぞ色相これちおくなり色相分離してはいかよ眼光落地すこゝに見ぬ智惠よよつて種々の語とうけ大利益無に落候て仏さまし〻く候

こはんかけざるときいかん學しやのいはく小魚大魚と呑又かけてのちいかん大魚小魚とのひ此心は舟の帆のゝりてあるときは大なる魚がちいさきうを、のひといふ也此のかゝ

〻らざるときはふさなる魚が大あるとのひといふこゝろなう此こゝろは諸宗に少しも知らず禪家の大事あり有と申さんとては世にある事を吐く語をかくし又無なる事を申さんとてい世にない事を吐て心をかくして生死思推の處をむつかしく申さん爲なり御理り御座候直に申べく候なり

りんざいの三よう三玄と申事の候かやうの事は申つくしがたく候天地の間に三つもとむ三つくろしと申事何ぞや是としかも三ぼうと申事ありとゝくの心は父母と我と是三つの實なり一つもかけては物ならぬ候三玄と申はみなもとの無性わくろきかたちなり出生して万の事と行ひ候爰に大秘密のことわりようの字これ則大事なり

大國のなんぜん和尚此猫兒を切る事は大衆こたへざるゆゑなり趙州爰ゑ來つてさうあひを取てかしらへおげ衣を貌ふあて〻和尚のまへに出る和尚このときねこと切て後悔す汝うしう甚ものつてめんぼく成る第一に色相の逆意をきるなり迷ひの衆生色心ともみ切と雖得ずたまゝ〻切といへどもぜんだうなれば放る〻所なし文殊のりけんはふたゝびつがず

と申応にて御

りんざいの四かつとて人の死たる所よいたりてあつすこの心たしのに心得れる僧をれなりたゞじやうしゆう僧と申は本ぶんにをとしてこれを至極す古人の見理此所にわらすす

でよりんざいは命根本不絶といへりしかれば當時の僧たち大なるあやまちなりとれみちくにして衣をこのへ人の眼をつぶして布施物をとりおのれが生々世々のほのほをまねくあはれむべきの第一なり

百丈やこの話の事大去ゆぎやうていの人かへつて因果あるや又なしやと〻ふ答ていはく因果に落ずとなり此報によりて五百生野狐の身ゑ墮していんくわはれき然あるものと申むねにて候未さとらずして別にふかき事御座候はんと思召さしく候此ふたのみ御

果と申いいんぐわにくらからずとの事なり深く因果とはれちぎといふ心にて候此話

のまなこは生々世々の事をきつねによせてとのれたる所大智なるゆゑに大智禪師とかや

申なり一朝大國にていろ〻佛道しゆ行の事れん〻に申上まゐらせ候又申す人迷ふとき

きは火ともつて火をけさんとく土ともつて山とかこはんとすかやうおろかなる事は人と

佛道ゑ心の遠さかる事萬里をへだて〻手には百八ぼんなうのきづなゝる珠數をつまぐり

二世三世といのり生れう死れうのたゝりと見いだし石塔卒都婆ゑきどくのあらとれもひ

枠にかけて死人と言葉をかはそ事をいひて袖をしぼるもろ〻の敎もろ〻の道理と失

ひ佛ぼさつにまう語をかけ義理とそひきいよ〻もうもくのとく竹のうちより天をはか

る物は生々世々うかむとあるべからず西方非西東方非東無地獄無極樂淨土非淨土けんど

んをきらずしてしかも又しかも外の大空さんまいよして大道化のうちよりたゞ正直のじひぎやう無ざんなり念をきつてしかもきらず是を通力自在のさうと申也から國我朝よいたり上下萬民佛道をねがふ事何宗かをうとて色々たて、はありといへども其源はいづれも極樂じやうぞふいたり地獄に入とそまじきとの方便也此淨土といふは何國なれば我心のうちにあり又地獄はいづれぞなれ心大事我心のうちにあり或人遠ゞ大師にとふ地獄はいづれの所ぞやこたへていはく汝が心中にとんじんちの三毒これなりとんじんちとは貪は欲とく万の愛念執着の欲を申なり嗔とは腹たつる念を申痴とはぐちとて何事も心のまゝになき事をなげき歎しみ我とわが心を惱ます事を申なり此三毒かくの如く善惡の報をつくり出し地獄にれつるなりちごくとて別に余の世界よある事にてはあらず又門極樂とはいづれのところぞやこたへていはく極樂淨土とて外にあるべからず汝が心中の三毒と拂ふ處すなはち淨土なりと答給ふ佛と衆生とへだて有事なし迷ひの衆生此とんじんち我本心にてなき事をしらず一念あいし又にくむによりて地獄におつるなりこの三毒をもと〻して八萬四千のぼんのう發るなりこれ則地獄なり佛といふもさとるといふも名はのはれども同じ道也わが本心をさとる人とをなはち佛と名つくるなりしかれは我心の外よ別に佛なき事をよく心得て此上を常々と、ろにかけ御工夫あらば道に御あたり候はん事うたがひあるべからず候現在の果を見て過去未來をしると御經にときおかれ候この心も今と、にて惡心惡逆をこゝろにわすれずしてつ〻しみ善事の心あつて取出し行ふ事也今此生ふて其応とわすれずば又今の心を未來へ引て入よ生をいたすべきとの事なり佛と萬の自在を得たりといへども見あたらざる事あり一ゐん無緣の衆生度するとあたはず二には衆生かいをつくる事あたはゞ三よはさらおう轉ぜるとあたはず前世のがうぬんによりかんとくしたる善惡のこつゝうなりのやうの決定の業はうをば佛ぼさつの身にても轉するとかなはず形の善惡福德の大小壽命の長短衆生の高低の事これら皆前世の業因よたにたる定業なり慈悲ゑんは福德の家にうまれ慳貪は貧苦の身よいたり柔和よんにくの心ゆゑすがたよく生れさては高位高家にうまる〻なり殺生したるものは短命にうまる〻うくのとくいづれもみな前世の惡ゐんにより惡果と得たる人このことはりとしりて今世にて惡行をつくらずば來世いかならず善果を得べき事唐土わが朝の祖師達をはじめ數多き知識のふみにも書殘し給ふ事どもをあつめし參らす

明治十九年十月五日飛刻御届
同　年十月　日出版

定價金壹圓

東京府平民
森　仙　吉
日本橋區榮町四丁目十一番地

飛刻出版人

發兌　東京榮町四丁目　鶴聲社本店
仝　大坂心齋橋南詰東京屋　鶴聲社支店
仝　横濱吉田町壹丁目　鶴聲社支店
仝　西京寺町通り松原南　内山敬近堂

仝　西京寺町通り四條[illegible]　内山[illegible]堂

仝　[illegible]田町[illegible]丁目　[illegible]舗支店

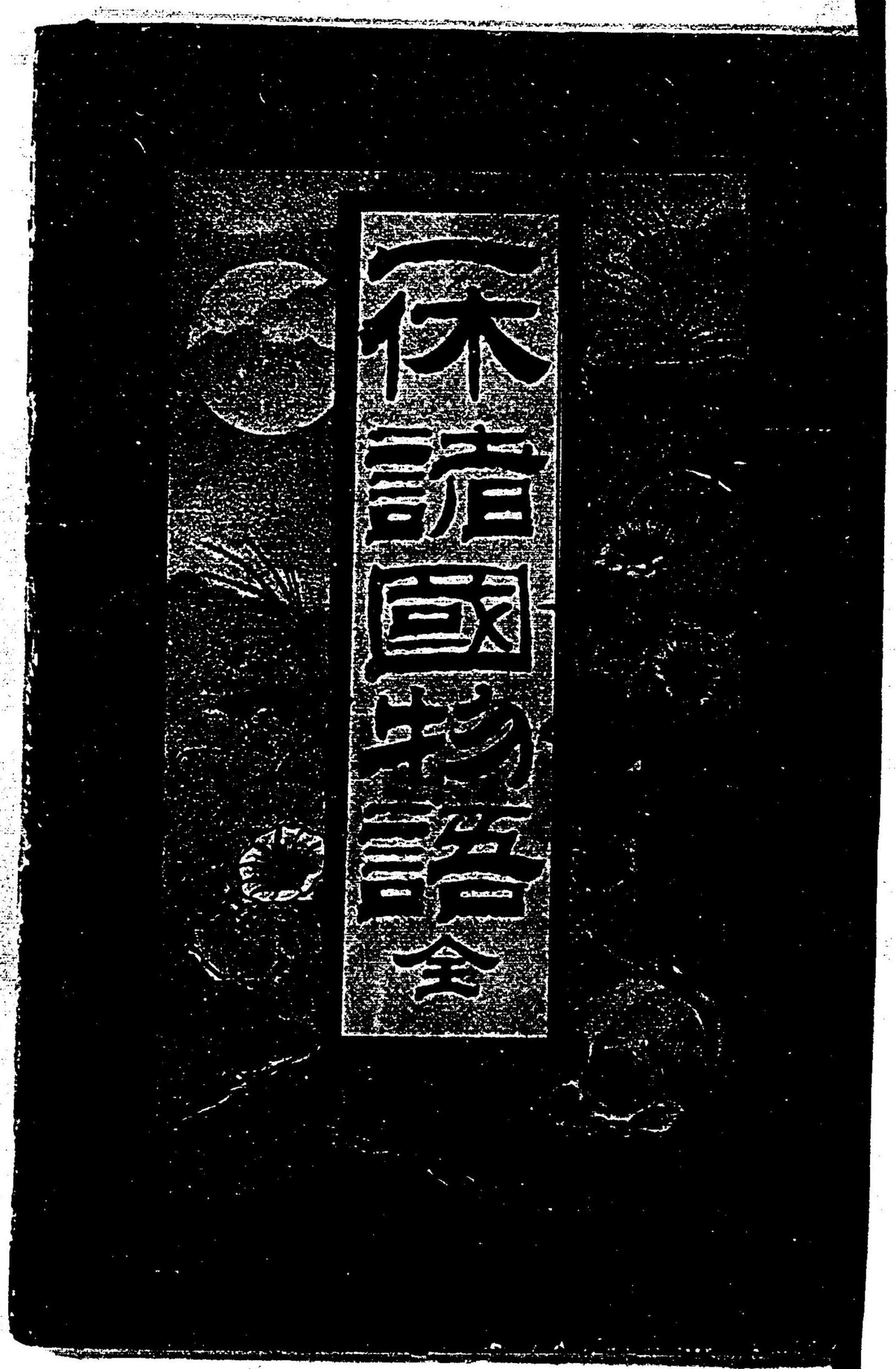
仝　[illegible]町[illegible]　[illegible]舗支店

發兌　東京[illegible]町四丁目　[illegible]舗本店

翻刻出版人　東京府平民　森[illegible]吉
日本橋區[illegible]町四丁目十一番地

明治十九年九月[illegible]日翻刻御届
同　年十月　日出版

定價金[illegible]



089861-000-1

特12-429

一休諸国物語

平田　止水／編

M19

DBN-0136